

全国の大学農場・センターの特色
“一農場一アピール”

No. 23

令和7（2025）年3月
全国大学附属農場協議会

はじめに

全国の大学農場・センターは、コロナ禍を超えて通常の教育研究活動を完全に復活させました。大学農場・センターのフィールドにおける実習は、自然環境の中で、土や農作物や家畜に直接触れ、手触りや匂いを感じながら、自然環境と共存する農業、農業を支える様々な生命、それらを食に結びつけるために必要な加工・流通などについて、体感的・体験的に学ぶことのできる貴重な機会です。また、友人たちと多様な関係を培う貴重な時期をコロナ禍で失った世代の学生たちに、友人と協調し、共感する貴重な時間を提供します。実習を通じた五感への刺激は、前頭前野を活性化し、豊かな感性や共感力、そして総合知を育むことが知られています。大学農場・センターのフィールド教育機能の「総合知の拠点」としての重要性はますます増していると言えます。

全国大学農場協議会に加盟する 55 大学農場・センターは、どの農場・センターもフィールド教育を通じた「総合知の拠点」としての機能を担っています。一方で、実験室レベルの最先端の研究成果をフィールドへ実装するための橋渡しの試験、スマート農業の実践、地域の農業の課題解決に向けたエクステンション機能、地域の人たちへの開放農園事業、子どもたちの体験教室、など地域のニーズに基づいた様々な活動に取り組んでいます。

「一農場一アピール」は、平成 14 年度に第 1 号が発行されて以来、毎年発行され、今号で第 23 号となります。各大学農場・センターの様々な活動を、加盟農場・センター間で共有すると同時に、文部科学省や農林水産省などの関係省庁、大学関係者、様々な関係団体、ならびに一般の方々に広く知っていただくことを目的として、各農場・センター毎に作成した渾身の 1 ページを集約した冊子になります。本号においても、各大学農場・センターが、コロナ禍を超えて取り組んだ様々な特色ある活動が、各大学独自の目線により紹介されています。協議会ホームページと合わせてご参照いただき、様々な分野の人材育成や社会共創に貢献している全国の大学農場・センターの活動にご理解を深めていただければ幸いです。

最後に、本号の編集にご尽力いただいた協議会常任幹事会の編集担当幹事である九州大学農学研究院の尾崎行生先生を始めとする関係者各位に心からの謝意を申し上げます、巻頭の挨拶とさせていただきます。

令和 7 年 2 月

全国大学附属農場協議会
会長 長尾慶和

全国の大学農場・センターの特色

“一農場一アピール” No. 23

北海道大学	1
帯広畜産大学	2
酪農学園大学	3
弘前大学	4
北里大学	5
岩手大学	6
東北大学	7
宮城大学	8
秋田県立大学	9
山形大学	10
福島大学	11
茨城大学	12
筑波大学	13
宇都宮大学	14
千葉大学	15
東京大学	16
東京農工大学	17
玉川大学	18
明治大学	19
日本大学	20
東京農業大学	21
山梨大学	22
信州大学(農学部)	23
信州大学(繊維学部)	24
新潟大学	25
石川県立大学	26
静岡大学	27
岐阜大学	28
名古屋大学	29
名城大学	30

三重大学	31
京都大学	32
京都工芸繊維大学	33
京都府立大学	34
大阪公立大学	35
神戸大学	36
近畿大学	37
龍谷大学	38
鳥取大学	39
島根大学	40
岡山大学	41
広島大学	42
県立広島大学	43
山口大学	44
徳島大学	45
香川大学	46
愛媛大学	47
高知大学	48
九州大学	49
佐賀大学	50
宮崎大学	51
南九州大学	52
東海大学	53
鹿児島大学（農学部）	54
鹿児島大学（共同獣医学部）	55
琉球大学	56

本誌に掲載された記事の内容を転載する場合には、全国農場協議会の許可が必要です。
ご注意ください。



子牛を丈夫に育てる研究の取り組み

飼料原料価格の高騰など、酪農業を取り巻く環境は近年ひとときわ厳しさを増しており、生産過程の損益低減は重要な課題です。子牛は免疫機能が弱く、ウシの生涯を通じて最も病気に罹りやすい状態にあります。当センターでは免疫機能や腸内細菌の解析を通じて、子牛を健康に育て上げる研究に取り組んでいます。

研究内容

下痢などを防除するためには粘膜免疫系の発達が重要です。しかし、初乳に頼る新生子牛は抗体産生能がとても低く、免疫系の発達動態には不明な点が多くありました。当センターの研究により、離乳期頃から腸管の抗体分泌が活性化し、特定の細菌群がそれを補助する可能性が明らかになりました。現在、有用細菌群を増やす飼養方法への応用研究を進めています。

教育・研究

当農場は農学部や獣医学部等における専門教育に利用されており、実践的な教育の場を提供しています。本研究も農学部の学士・修士研究として行われました。関連テーマとして、初乳と腸内細菌に関する研究のほか、子牛のルーメンを早期発達させる研究にも取り組んでいます。

新規プロジェクト

当センターはJSPS地域中核・特色ある研究大学強化促進事業(J-PEAKS)およびJST共創の場形成支援プログラム(COI-NEXT)に採択され、持続的な生産システム開発に関する多角的な取り組みが始まりました。本研究もプロジェクトの一部として継続し、将来的な現場応用を目指します。



新規導入した小型次世代シーケンサー



学生の採血トレーニング



北海道大学北方生物圏フィールド科学センター・生物生産研究農場
〒060-0811 札幌市北区北11条西10丁目
Tel:011-706-2584 Email: syomu@fsc.hokudai.ac.jp

帯広畜産大学 畜産フィールド科学センター

施設再整備事業

建設後48年を経過し、建物基本性能の低下や著しく老朽化が進行した事から、センター全体の再開発として施設群の集約化を行い、安全で機能的な教育研究施設へと生まれ変わりました。また、講義や実習環境の整備に伴い新たに「管理棟」の建設について現在継続中です。

集約化した新牛舎



■ 管理棟の建設について

- 工事期間: 令和6年10月～令和7年3月
- 運用開始: 令和7年4月



酪農学園大学

学校法人 酪農学園 フィールド教育研究センター



大学附属
とわの森三愛
高等学校



総面積135haの酪農学園(文京台)キャンパス

酪農学園の建学の精神(キリスト教に基づく「神を愛し、人を愛し、土を愛する」三愛精神および健土健民)と実学教育の理念に基づく教育の推進と質を保証するため、これまで附属農場や元野幌農場などの附属施設において教育研究が行われてきました。

2014年(平成26年)からは、教育研究の充実を図る目的でフィールドの施設を一元化して運営する「酪農学園フィールド教育研究センター」を設置して今日に至っています。

酪農生産、肉畜生産、作物生産の3ステーションを有する酪農学園フィールド教育研究センターでは、1年生全員の必修科目となっている健土健民入門実習をはじめ、専門教育の実験・実習など、多様な教科の授業科目が展開されるほか、教員・学生の研究フィールドとして高密度に活用されています。これらの施設・設備には農畜産関係者ばかりでなく、学会や市民団体などから見学者が訪れ、農畜産業に関する最新技術の啓発・普及の場としても利用されています。

～酪農生産ステーション～

酪農生産の実践的な教育・研究の場を提供する目的で、フリーストール牛舎、繋ぎ飼い牛舎の二つの異なるシステムで乳牛を飼養しています。また、循環農法に基づいた乳牛ふん尿の有効利用による粗飼料生産と良質な生乳生産と長命性を旨とした乳牛の育種改良を展開しています。



フリーストール牛舎



繋ぎ飼い牛舎

～肉畜生産ステーション～

肉牛(黒毛和種や日本短角種等)をはじめとして、豚、鶏、めん羊を飼養している元野幌地区の施設群において、エコフィードを取り入れた肉畜生産や放牧採草地を活用した実践的な教育や研究活動をサポートしています。特に黒毛和種においてはゲノミック評価値と体型審査に基づいた繁殖牛の選抜および交配計画を設計することで、精度の高い牛群整備に努めています。



肉牛牛舎



放牧中のめん羊

～作物生産ステーション～

施設として環境制御可能な4棟のガラス室をはじめ、大小13のビニールハウス、ファイトロン、乾燥舎、堆肥舎などを備えています。2haの圃場にはコムギやダイズ、ジャガイモ、スイートコーンなどが作付けされ、水田も完備しています。実践的な教育が展開されています。



水田



本学育成品種RG紫色無ルーチェ

〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582番地

TEL:011-386-1117 FAX:011-386-1574

E-mail:rg-nojo@rakuno.ac.jp URL:http://www.rakuno.ac.jp



弘前大学農学生命科学部 附属生物共生教育研究センター

学内外の研究者を農場に結集し

リンゴ園の気候変動影響をフィールドで解明

◇看板作物はリンゴ

当センター藤崎農場は、栽培面積世界一のリンゴ品種「ふじ」を育成した農林省東北農業試験場園芸部の跡地に設立され、譲渡された当初から現在までリンゴ園の割合が極めて高い農場です。2名の農場教員をはじめ、多くの学部教員がリンゴを研究材料にして農場を利用しています。

◇学部をあげて大規模研究に挑む

2014年、リンゴを研究材料にする農場と学部の教員が、その気候変動影響を追究するプロジェクトチームを結成、16樹・3品種から成るリンゴのミニ群落を3反復で農場内に造成し、大型研究予算を申請したところ、2018年に予算が採択



写真1 研究施設の概観

されました。早速、各ミニ群落を内包するように3棟のビニールハウス（対照棟・高温棟・高温高CO₂棟、写真1）を建設し、2019年から2022年まで所要の環境制御を実施して実証的なフィールド研究に取り組みました。

◇学部外の研究者も参加

「屋外の気温とCO₂濃度を監視し、ハウス内を常に屋外より3℃かつ200ppm高く保つ」というような環境制御は安価な市販のシステムでは困難でしたが、学部外や学外の研究者の協力を得て自前で実現できました。様々な専門の研究者が参加することにより、光合成、樹体成長、果実品質、炭素動態、窒素動態に及ぼす高温や高CO₂の影響を4年間にわたって追跡し、多くの興味深い知見が得られました（写真2）。マスコミの関心も高く、全国放送を含む多くのテレビ番組や新聞で紹介されています。



写真2 対照棟 (A) と高温高CO₂棟 (B) の果実。2022年、品種は「つがる」。高温高CO₂棟の果実は大きいが着色が劣る

◇研究の波及効果

本研究が契機となって、ニュージーランドの研究所から共同研究の誘いを受けました。2024年7月から、本学部の果樹研究者との間で、リンゴの高温影響をメインテーマとする国際共同研究がはじまっています。3棟のビニールハウスは、農場の研究施設として新たな活用策を模索中です。

藤崎農場: 〒038-3802 青森県南津軽郡藤崎町大字藤崎字下袋7-1

Tel: 0172-75-3026 Fax: 0172-75-5646 E-mail: jm753026@hirosaki-u.ac.jp

金木農場: 〒037-0202 青森県五所川原市芦野84-133

Tel: 0173-53-2029 Fax: 0173-52-5137 E-mail: jm532029@hirosaki-u.ac.jp

なりたい、を超えていく



北里大学 獣医学部

Kitasato University School of Veterinary Medicine

附属フィールドサイエンスセンター

八雲牧場

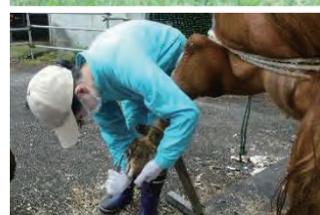
八雲牧場は1976年に開設され、1994年から土一草一家畜による物質循環を重視した「自給飼料による資源循環型畜産」を基本方針に放牧と自給粗飼料のみでの肉用牛（北里八雲牛）生産を開始しました。2009年に国内初、肉用牛での有機JAS認証を取得し、2018年からは牧場スタッフの人件費も含めた運営経費の黒字化を目指し、北里八雲牛の増頭計画（出荷頭数を50頭から125頭に）を開始しました。現在は非経常経費を除けば牧場の人件費も含めた収支均衡を達成し、年間120頭前後の北里八雲牛を出荷しており、有機牛肉の出荷頭数では日本で一番多い牧場になっています。牧場実習においては牧場型有機畜産の生産から販売、消費まで体験できる、学生の印象に残るプログラムを用意しています。

来年八雲牧場は開設50周年を迎えます。持続可能な畜産とは何なのか、経済性も含めて牧草型有機畜産の科学的検証も含めて我々が今後の日本の畜産の発展に少しでも寄与できるよう大学附属牧場としての役割を發揮していきます！



十和田農場

青森県の十和田キャンパス内で、牛は肉用種を5品種、羊は希少種であるマンクス・ロフトン種を含めた2品種、ヤギ1品種を飼養しています。粗飼料はほぼキャンパス内で生産しており、家畜の糞尿を堆肥化して再び草地に還元する循環型畜産を実践しています。学生たちは通年、農場での実習や実験が可能で、歩いて数分という立地で多種多様な動物や圃場を活かした教育研究が展開できるのは、十和田キャンパスの強みです。（写真上：マンクス・ロフトン種の子羊、下：牛の削蹄実習の様子）



八雲牧場 〒049-2121 北海道二海郡八雲町上八雲 751

TEL：0137-63-4362(代)

十和田農場 〒034-8628 青森県十和田市東 23 番町 35-1

TEL：0176-24-4371(代)

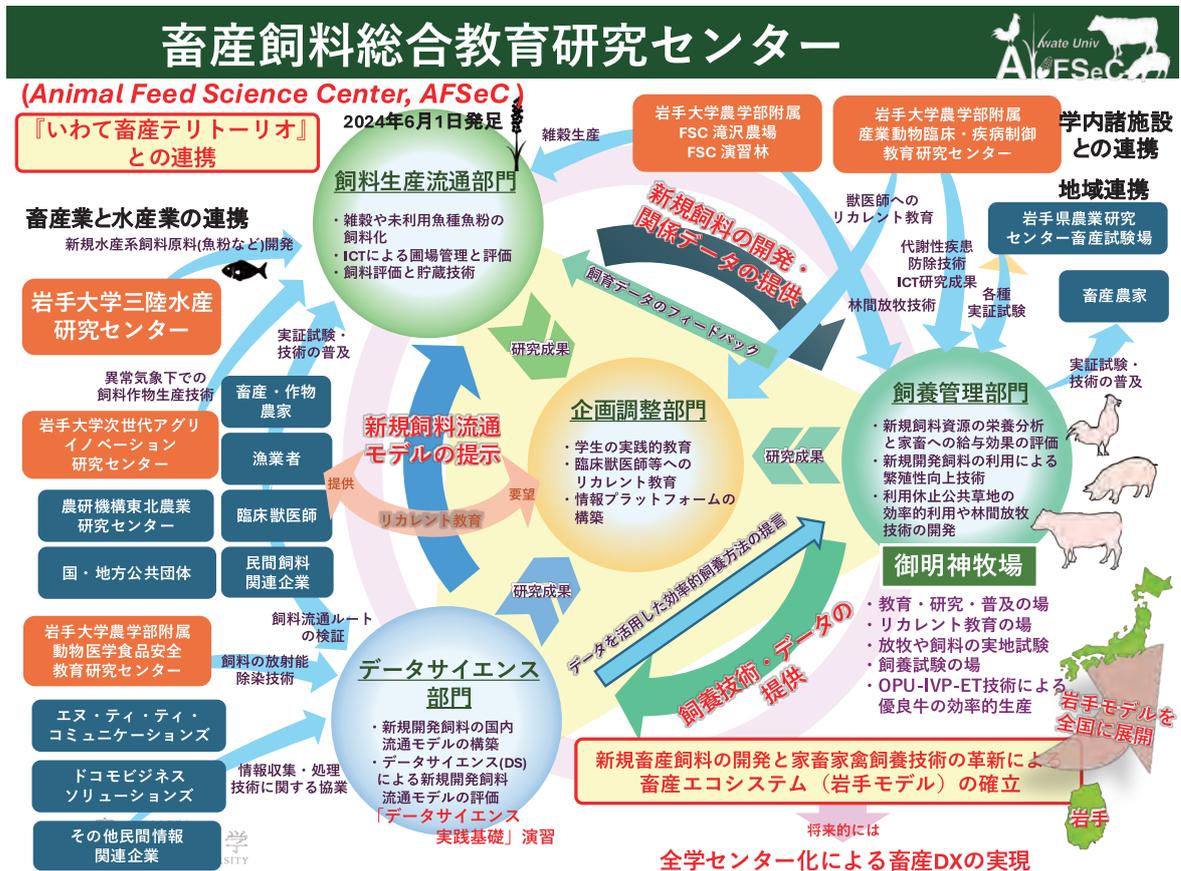
e-mail nojo@vmas.kitasato-u.ac.jp

URL <http://kitasato-fsc.com/>



岩手大学農学部附属 畜産飼料総合教育研究センター（AFSeC） 御明神牧場

御明神牧場は、附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センター（FSC）の持続型農業生産技術分野（滝沢農場）から、AFSeCの施設に移管されました。



AFSeCは、我が国における畜産飼料の供給・流通に関する諸問題の抜本的な解決を目指し、

- 1) 新しい飼料供給・流通モデルの開発、
- 2) 雑穀などの新規飼料原料の活用、魚粉など既存飼料原料の品質改善を通じた新規畜産飼料の開発、
- 3) 飼料給与法など家畜飼養に関する技術革新
を通して我が国の食料安全保障に資することを目的とし、畜産に関する教育・研究の重要拠点の一つとして設置されました。学生に対する畜産飼料と家畜飼養に関する実践的教育と畜産技術者・臨床獣医師に対するリカレント教育もミッションとしています。

御明神牧場の牛舎建設が始まります。

かねてからの課題であった御明神牧場の新牛舎の建設が令和6年度末に始まります。従来の牛舎は、昭和47年に建設されたもので、50年以上を経過し、実習・研修の実施にそぐわない環境が課題となっていました。AFSeCの目的達成のために新牛舎の活用が期待されます。

岩手大学農学部附属畜産飼料総合教育研究センター御明神牧場

〒020-0581 岩手県岩手郡雫石町御明神大石野

TEL : 019-692-3031 FAX : 019-691-1016 E-mail : hirata@iwate-u.ac.jp (文責 : 平田)



東北大学大学院農学研究科 附属複合生態フィールド教育研究センター

環境やアニマルウェルフェアに配慮した 持続的土地利用型家畜生産の教育研究

当センターは、総面積2,215 haと大学附属農場として全国一の規模を誇り、森林、野草地、牧草地および耕作地が地形に応じて複合的に配置されています。

その中で、約100頭の牛群を用いて、世界的に進められている持続可能な畜産の実現のため、中山間地特有の多様な植生を有効に活用した土地利用型の家畜生産のメリットを追求するとともに、アニマルウェルフェアに配慮した飼育方式に関する教育研究を進めています。



当センターは、平成23年度より 文部科学省全国共同利用拠点「食と環境のつながりを学ぶ複合生態フィールド教育拠点」に認定されています。多様化する社会と学生のニーズに応えながら「食」の生産と「食」を支える環境とそれらのつながりを学ぶ場を提供しています。令和3年度（第3期）からは留学生や他学部など、共修の範囲をさらに拡大したプログラムを実施し、複合的な視点からの学びを提供しています。

東北大学大学院農学研究科附属複合生態フィールド教育研究センター
〒989-6711 宮城県大崎市鳴子温泉蓬田232-3
TEL: 0229-84-7311(代表) FAX: 0229-84-6490
E-mail: far-syom@grp.tohoku.ac.jp
URL: https://www.agri.tohoku.ac.jp/jp/center/far_field/



公立大学法人 宮城大学 食産業学群附属農

「夏休みに親子で体験！リビングこども大学」を開催

農場体験を通して食べ物について知る『お米食べ比べ&チーズ作り』

仙台市を拠点とする地域密着型のメディア企業である(株)仙台リビング新聞社の夏休み子ども企画「リビングこども大学」と、農場の企画が一致したことから、仙台リビング新聞社主催の形で、2024年7月29日、宮城大学食産業学群の坪沼農場において、小学生を対象とした「リビングこども大学『お米食べ比べ&チーズ作り』」を実施しました。

地産地消の大切さを知ってもらうために、「宮城県で開発されたお米の食べ比べ」と「ウシのミルクを使ったチーズ作り」の2部構成として募集したところ、100件を超える応募があり、当日は16組の親子約40名が参加しました。「お米の食べ比べ」では、自動播種機での播種から田植機の苗取りを見学してもらい、自分たちで穂から籾を脱穀し、籾殻を剥いて玄米にしてもらう作業も行いました。「チーズ作り」では、牛舎の見学から、ミルクのタンパク質がレモンの酸によって凝固するプロセスを体験してもらいました。プログラム終了後には修了証をお渡ししました。引き続き、子ども達に「食」に対する理解を深めてもらう場としても、農場を活用していく予定です。



<宮城大学食産業学群附属農場>

◆旗立農場

〒982-0215 宮城県仙台市太白区旗立 2-2-1
Tel:022-245-2211 (Fax:022-245-1534)

◆坪沼農場

〒982-0231 宮城県仙台市太白区坪沼字沼山 35-3
Tel:022-281-0053(Fax 兼用)

URL <https://www.myu.ac.jp/about/institution/taihaku/>

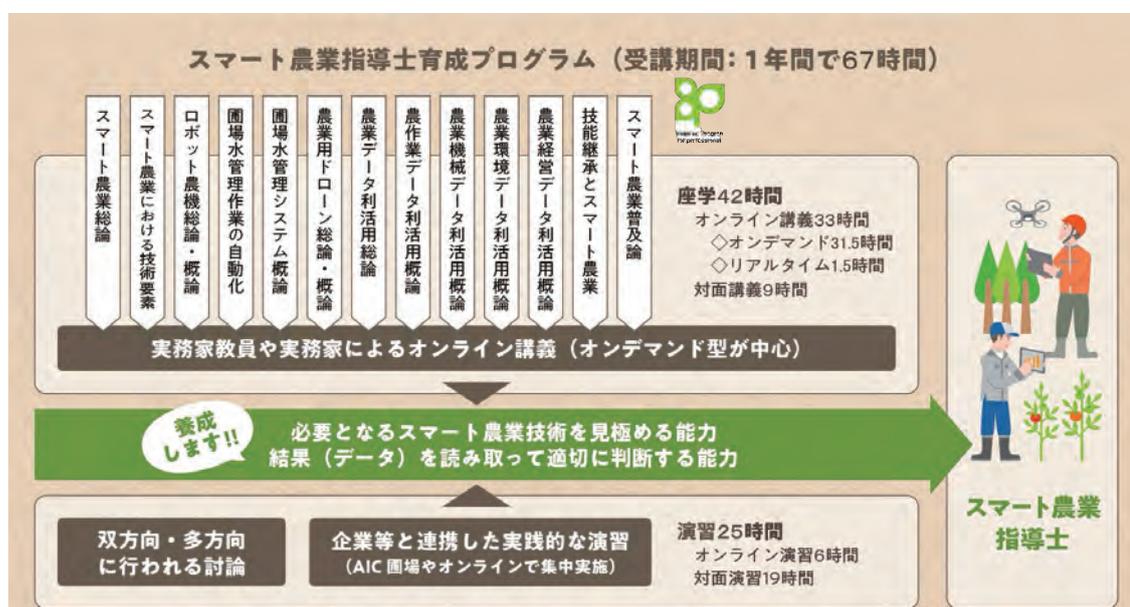
秋田県立大学



アグリイノベーション教育研究センター

当センターは、総面積190ha、164haの圃場と大型機械や畜舎など装備し、稲作・畑作・果樹園芸・畜産部門を擁して専任教員、技能スタッフなどによって運営されています。2021年度からは大学の農場としての機能を持ちつつ、秋田県におけるスマート農業の教育・研究・地域貢献を担う農工連携拠点として再編され、全国的にもユニークな社会人教育に取り組んでいます。

社会人教育プログラム スマート農業指導士育成プログラム



当センターでは、スマート農業技術の普及・指導に貢献できる人材の育成を目的に令和4年度から主に社会人を対象にしたスマート農業指導士育成プログラムを開発しています。本プログラムは文部科学省の「職業実践力育成プログラム(BP)」に認定され、所定の条件を満たした修了者に対し、秋田県立大学が履修証明書を授与すると共に、秋田県立大学からスマート農業指導士の資格を授与します。

以下の知識・技術・技能の学修を目指しています。

1. 生産・経営課題の抽出のためのコンサルティングに関する知識・技術
2. スマート農業技術の基本原理の理解と体系的知識
3. スマート農業技術導入に必要なインフラ・資格及びスマート農業技術に関連する施策・事業・法令の知識

令和4年度22名、令和5年度27名が修了し、令和6年度は20名が受講しています。

連絡先 〒010-0451 秋田県南秋田郡大湊村字大湊6-5
TEL 0185-45-2858 E-mail aic-jimu@akita-pu.ac.jp
<https://www.akita-pu.ac.jp/aic/>



フードロスの削減と未利用資源の利活用を 目的とした加工品の開発

山形大学農学部附属やまがたフィールド科学センターでは地域に眠っている未利用資源を発掘し、在来果樹等の商品価値を高め、フードロスの削減を目的とした加工品の開発を行っています。

加工品開発のポイント

- ・農学部附属やまがたフィールド科学センターエコ農業部門（高坂農場）で生産され、傷などにより廃棄となるリンゴ果実と抗酸化能が豊富な在来果樹であるヤマブドウ果実を使用したSDGsミックスジャムが完成しました。
- ・ヤマブドウの栽培・収穫を初めとし、ヤマブドウとリンゴの比率決定やラベルデザインなど、ジャム作成におけるほぼ全ての作業は学生主体で行いました。



SDGsミックスジャムの制作過程

学生によるラベルデザイン



製作や販売は学生主体

国内の生食用果実生産現場では高品質果実生産を求めているため廃棄果率が高い。この取り組みでは、そのような廃棄果実とともに、在来果樹等の未利用資源の利活用を組み合わせ、フードロスの削減にもつながる抗酸化力の高いポリフェノールを多く含むヤマブドウを用いた高付加価値SDGsジャムを開発しました。

〒997-0369 山形県鶴岡市高坂字古町5-3
山形大学農学部附属やまがたフィールド科学センターエコ農業部門（高坂農場）
TEL:0235-24-2278（代表） FAX:0235-24-2270
URL:<http://www.tr.yamagata-u.ac.jp/~fschp/index.html>

「農場米」で農場をアピール

福島大学食農学類附属農場では68.9aの水田に「コシヒカリ」と「天のつぶ」を作付けし、1年生が農場実習で田植・生育調査・収穫を行っています。

この水田で生産された「天のつぶ」を11月5日から9日までの5日間、学生食堂の米飯のほかテイクアウト弁当やおむすびもすべて「農場米」として提供しました。

また学生食堂入口では連日学生が米販売を行い、食農学類と「農場米」をアピールしました。

学生食堂には約900kgの精米を提供し、「農場米」販売では職員の予約を合わせ、2kg袋を2品種合計で約300袋販売できました。

小規模な農場で米以外は販売できる品目もありませんが、実習で収穫した野菜類は食農学類のホールで学生に無償提供しており、上級生も1年次に行った農場実習を思い出しながら持ち帰っています。

これからも「農場米」の取り組みを通じて農場実習と附属農場のアピールを行っていきたいと思います。



〒960-1296 福島県福島市金谷川1番地
TEL 024-548-8212 FAX 024-503-4990

ASEAN 各国の農業省行政官の方々が 視察に訪れました

当センターでは、2018年にはJGAP認証、2020年からはASIAGAP認証を取得し、実習を通して学生にGAP教育を行っております。

2024年12月3日にASEAN各国の農業省の行政官22名が各国GAP指導の参考とするため、GAP導入の課題と解決策および技術指導法を理解することを目的に当センターを視察しました。当センターでのGAP認証取得に至るまでの経過や学生実習や労働安全の取り組みについて技術職員が説明し、その後、野菜調整庫と機械庫で管理状況の視察を行いました。行政官の方々は熱心に講義や見学に参加され、質疑応答も活発に行われました。

今後も研修の受け入れや公開講座の実施等、近隣地域に向けてGAPの活動を広げていけたらと考えております。



宮口学部長の挨拶



技術職員による説明



野菜調整庫の視察



機械庫の視察

茨城大学農学部附属国際フィールド農学センター

〒300-0331 茨城県稲敷郡阿見町阿見 4668-1

TEL: 029-888-8702, FAX: 029-888-8715

E-mail: fscenter@ml.ibaraki.ac.jp HP: <https://farm1.agr.ibaraki.ac.jp/>

筑波大学つくば機能植物イノベーション研究センター 次世代農業研究部門（T-PIRC 農場）

農場生産物を活用した 新たな大学 PR 事業の展開

筑波大学 T-PIRC 農場では、実習等で栽培・収穫した生産物の一部は、「T-ばーくん」の商標を登録して、スーパー「カスミ」大学内店舗においてサツマイモ、トマト、果物等を販売している。しかし、米などは現在、玄米のまま精米業者に出荷して、小売り商品としての取り扱いは行っていない。一方で、筑波大学では大学ショップ（UT ショップ）はあるが、大学の特色を打ち出した商品の企画は少なく、卒業生や受験生に大学の活動を強くアピールする記念品の企画が求められている。そこで、T-PIRC 農場では、2021 年から大学本部事業開発推進室（2024 年から事業・リレーション推進室として改組）と共同で、地元企業と連携して農場生産物を活用した大学オリジナル商品の開発を始めることとなった。

2022 年には、茨城県の地元企業と共同した「一期一会プロジェクト」によるせんべい製造に原料米を提供するとともに、製品開発にも参加して、「FUTURE SENBEI」として販売し、卒業式シーズンと重なり好評を博した。現在、せんべいは学内 UT ショップおよびメーカー店頭で常時販売している。2024 年は、食品企業との共同企画で、収穫ロス軽減を目指して、サツマイモ規格外品を活用して「大学芋」を製造し、地元スーパーを通して販売する企画が進行している。また、県内チョコレート製造会社との共同企画では、農場実習で収穫した米を使った米チョコ商品の販売企画も進行中で、命名とパッケージデザインには本学芸術専門学群の授業の一環としても参照している。

このように、T-PIRC 農場は、大学キャンパス内に圃場があり、生産物を活用しやすいという利点を生かして、大学本部や地元企業と共同して、市民や学生に、農場の役割や大学の活動を広めることによって、大学への理解・支援拡大につながる事業を展開している。



連絡先：〒305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1
筑波大学つくば機能植物イノベーション研究センター
（T-PIRC）農場
TEL：029-853-2541 FAX：029-853-6205
E-mail：center-jimu@nourin.tsukuba.ac.jp

「一期一会プロジェクト」
地元企業とのコラボによるせんべい
FUTURE SENBEI「きらめき」
UT ショップ等にて販売中

宇都宮大学 農学部附属農場

大学独自水稲品種「ゆうだい 21」 関係者集う『ゆうだいサミット 2024』開催

宇都宮大学が開発した水稲品種ゆうだい 21 は、今年度も全国で開催されたお米の食味コンテストで上位を独占する状況が続いています。その中、ゆうだい 21 の魅力を広めることを目的としたイベント **ゆうだい 21 サミット 2024** を 2025 年 2 月 1 日に宇都宮大学陽東キャンパスで開催し、お米の生産者や流通業者を中心に 200 名以上が参加しました。

今回はゆうだい 21 のみの食味コンクールを実施し、215 件の応募がありました。食味装置による審査を通過したお米のみが最終審査に進むことができるという難関食味コンクールです。最終審査では、パネラー10名および学生・教職員 50 名が最終審査に残った 5 点すべてを試食し、パネラーによる当日審査(10名、持ち点 5 ずつ)=計 50 点、学生・教職員による事前審査(50名、持ち点 1 ずつ)=計 50 点、両審査の評価を合算して 100 点満点で最優秀賞が決定されました。ゆうだい 21 のみの食味審査のため、試食した参加者からは「どれも美味しく、選ぶのが難しい」との声が多く寄せられました。その中で、群馬県吾妻郡嬭恋村の生産者様が出品した「ゆうだい 21」が最優秀賞に輝き、池田学長より表彰状と記念品が授与されました。

さらに、「ゆうだい 21 の食味および各種特性に関する研究」についての講演が行われました。香西客員教授と大石客員教授が、官能評価や力学特性測定の結果をもとに米飯の特性について詳しく説明し、ゆうだい 21 の食味評価がなぜ高いのか、その理由に迫るものでした。**奇跡のお米ゆうだい 21 の進撃はまだ続きます。**





Center for Environment
Health and Field Sciences
CHIBA University

千葉大学 環境健康フィールド科学センター 教育環境整備グループ (KKSG) の活動

－農福連携の実践－

千葉大学は2008（平成20）年度から構内の清掃を行う「教育環境整備グループ」を設置して障害者雇用を進めており、柏の葉キャンパスにおいても、2015（平成27）年度、環境健康フィールド科学センターに障害者5名と支援員2名で構成される「教育環境整備グループ (KKSG)」を設置した。

普段、KKSGは建物内のトイレ・教室・階段・廊下の清掃、キャンパス内のごみ拾い、除草、落ち葉清掃等を業務としており、特に圃場周辺の整備は学生実習の円滑な実施に貢献している。さらに清掃業務の合間に少しずつ農作業を取り入れ、2023（令和5）年度からはジャガイモ（春・秋作）とタマネギの植え付けから収穫までの栽培管理だけでなく収穫後の調整、計量、袋詰めをしてキャンパス内にある農産物直売所「緑楽来（みらくる）」の陳列棚に並べるまでを行っている。



▲「緑楽来」に陳列されているタマネギ



▲タマネギの追肥作業



▲タマネギの調整作業



▲ジャガイモの植え付け作業



▲「緑楽来」にジャガイモを陳列



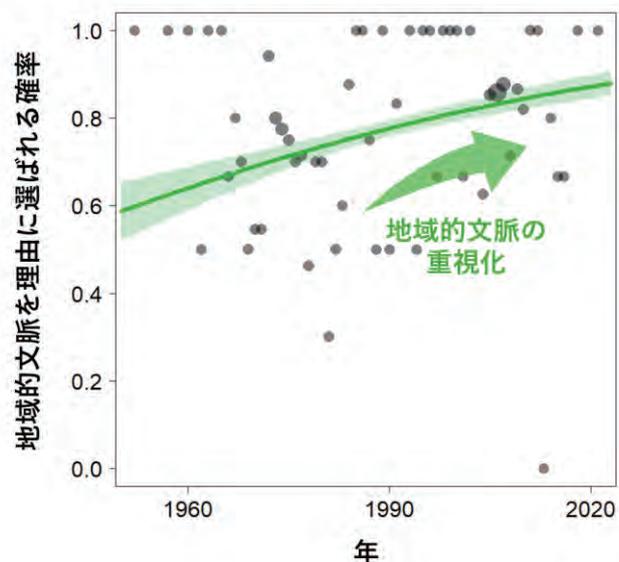
千葉大学環境健康フィールド科学センター
千葉県柏市柏の葉 6-2-1
Tel: 04-7137-8000 Fax: 04-7137-8008
URL: <http://www.fc.chiba-u.jp/>

人間社会と生態系の関係を「市の花」から読み解く

地方自治体の自然観の変化を明らかにしました

東京大学附属生態調和農学機構は、持続的な生態系サービスを可能にする農林業や社会のあり方を探求しています。このたび、地方自治体の間で人間社会と生態系の調和に関わる認識変化が進んでいることを、「市の花」の制定傾向の解析から明らかにしました。

「市の花」は、各市が市政の周年記念や市町村合併などのたびに制定している市公式のシンボル生物です。日本全国の815自治体(792市および東京都の23特別区)の市の花を調べたところ、近年になるほど多様な花が市の花に選ばれていること、さらに、「市の特産品である」「地域の固有種である」といった地域的文脈(地域に根差した価値)を理由に選定される確率が近年になるほど上昇していることがわかりました(右下図)。地域的文脈を、IPBES(生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム)が提示している内生的価値(地域固有性などの人間とは無関係に本来備わっている価値)・道具的価値(特産品など人間にとっての有用性)・関係的価値(歴史的な所縁の深さなど、社会のアイデンティティや連帯に関わる価値)の3つに分類したところ、道具的価値が顕著に増加していました。以上の結果は、各市が地域的文脈を持った種、特に地域独自の道具的価値を持つ種を重視するなかで、他市では選ばれにくい花が選ばれるようになり、日本全体で市の花の多様化が進んでいることを示唆しています。このように地方自治体の認識変化が進むことで、生物資源を利用する中で地域ごとに育まれてきた社会-生態系の調和的關係が理解されるようになり、今後保全政策などに反映されていくことが期待されます。



論文情報

Yoichi Tsuzuki, Haruna Ohsaki, Yawako W Kawaguchi et al. (2024) Nationwide diversity of “city flower” is increasing. *Ecological Research*

〒188-0002 東京都西東京市緑町1-1-1
TEL: 042-463-1611
Email: admin@isas.a.u-tokyo.ac.jp

生態調和農学機構

FAX: 042-464-4391

URL: <https://www.isas.a.u-tokyo.ac.jp>

フィールドミュージアム本町(FM 本町水田)は東京都府中市に所在し、府中キャンパスから自転車で15分程度の距離に31,301m²の面積を有し、都市型農業分野、稲作部門のフィールドとなっています。

実習教育

FM 本町水田では、生物生産学科1年生全員に稲の育苗から収穫までの栽培実習を実施しています。専攻実習を選じた2年生には、稲栽培をはじめとしてバレイショ・サトイモ・ジネンジョ等の芋類やマコモタケ栽培についても周年を通じた実習を行っています。



マコモタケの研究

マコモタケとはイネ科の湿性植物マコモに黒穂菌が感染することにより形成される菌えいのことで(茎の一部の節間が肥大化したもの)、中華料理などに高級食材として使われています。マコモタケ栽培の歴史は2800年以上とされていますが、マコモと黒穂菌の関係は未だ不明な事が多く、FM 本町水田ではその解明に向けて多くの内外の研究者と共に研究を進めています。

研究利用

本町水田は育種・病害防除・イネレトロウィルス・遺伝子保存・直播栽培技術・水田除草機開発・有機栽培・田畑輪換・ドローンを用いた成長解析モデルの作成等多くの研究に利用されています。



東京農工大学農学部附属広域都市圏

フィールドサイエンス教育研究センター (FSセンター)

Tel:042-367-5812 Fax:042-367-5801

Mail: fs-kikaku@m2.tuat.ac.jp



玉川大学

農産研究センター

北海道弟子屈農場



美留和晴耕塾

醸造用ブドウの試験栽培

弟子屈農場では、弟子屈町とともに醸造用ブドウ栽培等の情報交換を進めながら2009年から試験栽培を行っている。道内自生のヤマブドウと交配して池田町で開発された山幸・清舞の2品種を栽培している。両品種とも耐寒性に優れ、特に山幸は2020年に国際ブドウ・ワイン機構の登録品種となった。

近年、弟子屈農場の山幸・清舞は、春季の気温が上昇傾向にあるため、萌芽や開花期が早まり、5月中頃に晩霜害が発生している。耐寒性品種でも、新芽の展葉が早いと霜による被害を受けやすい。そこで、2024年5月に燃焼法による霜害対策を試験した結果、防御に一定の効果が見込まれ、今後も実施時間・規模について検討を続けたい。

一方、2024年8月には、弟子屈町によって屈斜路カルデラワイナリーが竣工された。この施設では、2024年に弟子屈農場で収穫した山幸(約220kg)を使用し、約140Lのワインを醸造中である。



醸造用ブドウ(山幸)



晩霜害を受けた新芽



健全な新芽



晩霜害防止のため燃焼法を実施



屈斜路カルデラワイナリー



除梗作業中



発酵前



発酵後 約1ヶ月

弟子屈農場紹介

玉川大学北海道弟子屈農場は阿寒摩周国立公園内に位置し、1972年から運用が開始された。2014年には学習・宿泊機能を備えた美留和晴耕塾が竣工し、農場内や演習林の他、周辺の屈斜路湖や硫黄山、釧路川などを活用した実習・研究を農学部中心に実施している。近年は、併設校などを対象とした研修や、学部を超えた教育・研究の場としての活用も進めている。

〒088-3331
北海道 川上郡 弟子屈町 美留和 439-1
Toll:015-482-3111 Fax:015-482-3699



玉川大学 農学部ウェブサイト



農学部実習での硫黄山見学



複数の学部合同の冬季実習



明治大学黒川農場



明治大学黒川農場は、農学部（生田キャンパス）の近くに立地し、年間を通じて体験型実習教育及び研究活動に対応できる多目的な都市農場を実現するため、下記3つのコンセプトを基本としています。

1. 【環境共生】有機栽培をはじめとする、環境保全型農業の実践から生まれる環境との共生
2. 【自然共生】生物多様性の保持とともに、子供・市民・学生等への環境教育の場として活用する里山との共生
3. 【地域共生】地域と連携した研究交流、社会人を対象とした「アグリサイエンス講座」の開講等、地域との共生

さらに黒川農場では、植物工場のような先端技術を利用した生産システムと有機栽培等の環境保全型生産システムを併せ持ち、幅広い実習教育や研究が可能となっています。

黒川農場で行われる実習や研究、各種活動は、農学部のみならず他学部や地域社会、国際協力まで視野に入れたものであり、黒川農場は明治大学のシンボルの一つに位置づけられています。



黒川農場本館



生産ハウスのイチゴ栽培



農場実習の様子



里山実習の様子

連絡先：〒215-0035 神奈川県川崎市麻生区黒川 2060-1 明治大学黒川農場

TEL：044-980-5300 FAX：044-980-5301



日本大学生物資源科学部

トマト・イチゴ・トルコギキョウの栽培をはじめました

昨年春に完成した新温室に栽培装置が設置されました。野菜温室には噴霧耕式の養液栽培装置（スプレーポニック）が導入され、トマトの周年栽培に取り組んでいます。また、高設ベンチのイチゴ栽培システム（ジャット式）によるイチゴの栽培も始めました。花き温室には独自の養液加温・冷却装置を備えた NFTシステムでトルコギキョウの栽培を行っています。学生が実習で使用し、現場での生産技術や管理方法を学びます。また、卒業研究等にも使用する予定です。収穫物の一部は学内無人販売所での販売や食堂に卸すなど、学内サービス体制を構築しつつあり、農場のプレゼンスを高めるようにしています。



右上から温室の空撮写真、噴霧耕システム、NFTシステム。左下は卒業研究でイチゴの管理を行う学生達。

(連絡先) 日本大学生物資源科学部 附属施設事務課
〒252-0880 神奈川県藤沢市亀井野1866 TEL 0466-84-3881
E-MAIL brs.huzoku@nihon-u.ac.jp
URL <http://hp.brs.nihon-u.ac.jp/~farm/index.html>

農 東京農業大学

農学部 伊勢原農場

伊勢原農場は東京農業大学の「実学主義」を実践する場です

伊勢原農場は、厚木キャンパスから南西に車で約 20 分（約 7 km）丹沢山麓の平坦な台地にある 3ha の農場と、約 15 km 離れた相模川水系の水田地帯にある 2.9ha の棚沢圃場（厚木市下川入）との総称です。2011 年（平成 23 年）に開場し、本学における農業実習プログラム及び試験研究の実践の場となっており、野菜、果樹、花卉、造園、作物（育苗・調整等は伊勢原農場、水田及び工芸作物は棚沢圃場）及び農業機械の 6 部門で運営しています。

当農場は、農学研究を志す本学に在籍する全ての学生と研究者のための施設であり、各学科と農場の教員及び技術職員が互いに協力して運営しています。また、海外協定校を始め、地元自治体、関連団体、自治会、小・中・高等学校の体験実習や見学等も受け入れています。



伊勢原農場野菜路地圃場から



伊勢原農場本部棟から



棚沢圃場

フィールド施設研修生制度

本学農場の特徴的な制度で、農業技術の習得を目的とした、1 年制の実践教育プログラムです。

高等学校卒業見込み、または卒業 1 年目の方に応募資格があり、このプログラムで成績良好な方は本学の総合選抜型入試受験者として、農場長の推薦を受けることができます（ただし、入試の受験資格として高等学校卒業時の全体の評定平均値が普通科 3.2 以上、普通科以外は 3.5 以上で最終選考に合格することが条件）。

詳しくは、本学ホームページまたは直接農場にお尋ねください。



野菜部門



花卉部門



果樹部門



作物部門



入場・修了式



富士農場練習生との合同研修旅行

〒259-1103 神奈川県伊勢原市三ノ宮 1499-1

T E L : 0463-74-5437

E-mail : farm@nodai.ac.jp

附属農場



山梨大学生命環境学部附属農場は学部附属施設の1つとして甲府市小曲地区内に総面積約2.6haの規模で設置されており、場内の畑やガラス温室では山梨県の特産果樹であるブドウやモモの他に地域特性に適した様々な作物を栽培し教育・研究に利用しています。

実習風景



・果樹・野菜栽培実習(3年次生)
モモ収穫作業および果実品質調査の様子です。
各種データのまとめ方やチームでの役割分担などを楽しみながら学んでいます。
また品質調査で使用しなかった分は学生が持ち帰りおいしく食べました。



●国立大学法人 山梨大学
生命環境学部附属農場
〒400-0841
山梨県甲府市小曲町字上五割675-1
TEL/FAX 055-241-6383
E-mail fuzokunojo-tr@yamanashi.ac.jp
HPアドレス <http://www.les.yamanashi.ac.jp>

信州大学農学部附属アルプス圏フィールド科学教育研究センター（AFC）

アルプスの里山でフィールドサイエンス

清らかな空気と水と緑に囲まれた環境で、より実践的なフィールドサイエンスを探求し、年間を通じて季節の変化に対応したフィールドでの教育・研究を行っています。農場がキャンパスに隣接する環境を生かしたラボとフィールドの相互補完的な研究推進を目指しており、圃場や農産物は、研究の場や材料として活用されています。また、八ヶ岳山麓に位置する野辺山ステーションは、中部高冷地域における農業・環境教育共同利用拠点として学内外の研究者に開放され、高冷地という特殊環境での研究推進に利用されています。

AFCでは、実習を中心に9科目を開講しています。植物系では稲、果樹、蔬菜、花卉の栽培管理や収穫物を使った食品加工、動物系ではエサ作りから家畜・家禽の飼養管理、食肉加工を学びます。夏は暑く冬は寒い自然環境の中で、単調な作業も多く行いますが、農・畜産業の実体験を通じて、基礎技術の意義や重要性を学び、現場への理解を深める貴重な機会を提供すると共に、共同作業により学生同士の仲を深める場にもなっています。学生たちが実習で生産に携わるイチゴ、米、シクラメン、漬物などは、構内販売所で学生、教職員、地域の方々に向けて販売されており、あっという間に売り切れる人気の生産物です。



ジャム加工（植物コース）



牛体測定（動物コース）

地域とつながり、育まれるフィールド

農場で生産された果樹や野菜販売を主体とした地域交流イベント“信大マルシェ”では、イチゴの栽培管理体験、トラクターの試乗、バター作り体験などを新たに加え、大人から子どもまでよりいっそう楽しめるイベントとなりました。また、近隣の飲食店や農業高校などによる様々な出店もあり、多くの地域住民の方々、学生、大学関係者が農場を訪れ、賑やかな1日となりました。また、親子で参加する土と緑の体験講座では、農作業から収穫、加工、試食と盛りだくさんの内容を7回にわたって実施し、食と農業の面白さを伝えています。最終回では林業について学んだ後、新米と豚汁に舌鼓を打ちつつ、「来年も参加したい！」との声が聞かれました。



イチゴの栽培管理体験



親子で田植え体験

連絡先：〒399-4598 長野県上伊那郡南箕輪村8304

TEL 0265-77-1320 FAX 0265-77-1315



信州大学 繊維学部 附属農場

伝統的な蚕や桑や棉などの生物繊維資源を活用し
社会の課題解決に貢献する



繊維学部附属農場は繊維科学の研究教育の推進を目指した農場であり、明治43年（1910年）には上田蚕糸専門学校創立と同時に構内附属農場が設置され、昭和19年（1944年）には大室農場が新たに増設され2農場となりました。現在も生物繊維に関連する蚕やテンサンなどの野蚕、桑、棉、さらに綿羊の飼育・栽培を精力的に行い教育研究、地域貢献・連携事業、遺伝資源保存・農産物生産を展開しています。特に2022年には「野蚕研究センター」が

設置され、継代飼育の困難な野蚕の安定供給に向けた世界的にも珍しい取り組みが行われています。日本に生息する在来種11種および外来の2種のうち、9種の野蚕（ヤママユ、ヒメヤママユ、ウスタビガ、クスサン、シンジュサン、オオミズアオ、オナガミズアオ、エリサン、サクサン）の継代・飼育に成功し、これらの変異系統を含め7種類23系統が農場で保存されています。



さらに、2024年度は学内の戦略的プロジェクトとして大室農場を中心に「繊維学部大室農場学びの里プロジェクト」が実施されました。本プロジェクトは、大室農場を一般市民に開放し、長期休みを利用して首都圏等から長野県に来る中・高校生の学習合宿や体験学習として大室農場での体験型繊維実習を実施してもらうことを目標に立ち上げられました。最初の一步として、地域の小中高生にも実習を開放し、農場内の体験学習施設の設置と動画配信による遠隔生物観察を行いました。これらの取り組みは繊維科学・繊維工学を志す次世代の若者の育成に繋がると考えられます。しかしながら、アテンドするスタッフには大学組織だけでは人員・能力的に限りがあり、自治体や関連企業、ボランティアの包括的な地域・産官学連携チームの形成と協力が必要だと考えられました。このことは全国の農場における「次世代育成」や「地域連携」の実践の場としての課題と可能性が提案できたと思われま



。しかしながら、アテンドするスタッフには大学組織だけでは人員・能力的に限りがあり、自治体や関連企業、ボランティアの包括的な地域・産官学連携チームの形成と協力が必要だと考えられました。このことは全国の農場における「次世代育成」や「地域連携」の実践の場としての課題と可能性が提案できたと思われま

構内農場〒386-8567 長野県上田市常田 3-15-1 TEL.0268-21-5555 nojojm1@shinshu-u.ac.jp

大室農場〒389-0505 長野県東御市和 6788 TEL.0268-62-0090 nojojm1@shinshu-u.ac.jp

新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター - 農畜産業の未来を切り拓く学びと研究の拠点を目指して -



新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センターは、日本有数の農業地帯である新潟に位置し、自然環境を最大限に活用した教育と研究を行っており、農畜産業や環境科学に関する実践的な学びを提供し、持続可能な農業の実現を目指して多様な研究課題に取り組んでいます。

当センターでは、農学部の全学生を対象に、農畜産生産の基礎や栽培・管理を学ぶ「基礎農林学実習」を実施しています。この実習は、五泉市の村松ステーションと新潟市西区の新通ステーションで行われ、学生は播種から収穫、乳牛の人工授精から搾乳に至るまで、農畜産業の過程を体験します。また、この実習を通じて、環境負荷を最小限に抑えた持続可能な農業の重要性を学び、知識と実践力を深めています。近年、デジタル技術を活用した先進的な農業機器の導入にも積極的に取り組んでいます。可変施肥田植機や土壌分析装置、最新のロボットトラクター、温室効果ガスのモニタリングシステムなどを駆使し、農業のデジタルトランスフォーメーションを推進しています。これにより、次世代の高度農業人材の育成を目指し、スマート農業技術を実践的に学ぶことができます。一方、地域社会との連携も重要な活動の一環です。五泉市との協定を基に、地域中学校での食農教育実習や、児童・園児向けの酪農教育プログラムを実施し、地域の活性化にも貢献しています。これらの取り組みを通じて、地域の農業に対する理解を深め、次世代への農業の魅力を伝えることを目的としています。さらに、農業生産と環境保全の調和を追求する教育・研究を実施し、地域社会に開かれた教育の場を提供しています。また、大学での研究成果や技術開発を社会に還元する窓口としても機能しています。国内にとどまらず、日本海を挟んで向かい合う東アジアやアフリカ地域とも連携を強化し、共同研究や留学生の受け入れを積極的に行い、国際的な視点からも農業の発展に貢献しています。

今後も新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センターは、持続可能な農業の実現に向けて次世代の農業リーダーを育成するため、地域社会や国際社会との連携を深め、今後もその役割を果たしていきます。

〒 959-1701 新潟県五泉市石曾根 6934

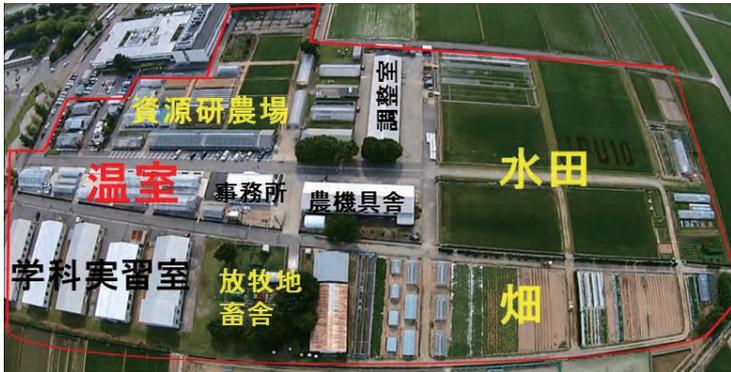
TEL: 0250-58-5737

E-mail : hyamashiro@agr.niigata-u.ac.jp



石川県立大学 生物資源環境学部 附属農場

概要



左：農場本部
右：末松果樹園(本部より1km離れる)

施設： 水田、畑、果樹園、温室、調整室、事務所など

総面積 4 ha

水田：1.3 ha、畑：0.5 ha、温室：0.1 ha、畜舎：0.2 ha、事務所など：0.4 ha、
資源研農場：0.4 ha、果樹園：1.1 ha

実習風景



実習内容：

作物(水稲、大豆の栽培)
野菜(露地ではスイカ、ハクサイ等20種類近くの野菜
施設ではトマト、キュウリ等の栽培)
果樹(リンゴ、ナシ、ブドウ、柿等の栽培)
畜産(牛、ヒツジ)

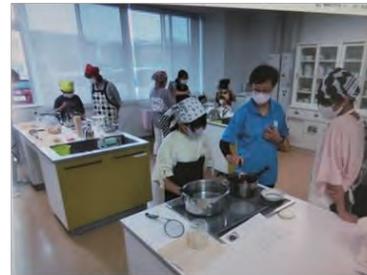
地域貢献 — ポケットゼミと地域交流



ヒツジの管理風景(除糞作業)



ブルーベリー収穫とジャム作り体験



ポケットゼミ 興味・関心がある学生が集まり、課題に取り組む活動や研究システム。
一部のゼミでは、学外の活動を通して、地域交流も行っている。

【連絡先】 〒921-8836 石川県野々市市末松1-308
TEL: 076-227-7531 E-mail: mtakai@ishikawa-pu.ac.jp
URL: <http://www.ishikawa-pu.ac.jp/research/blog/farm/>

自ら学び、観察、考える実習プログラム —「私のミカン」—

カンキツ栽培が盛んな静岡県に位置する当センターでは、カンキツ園が約3haと、フィールド全体の中で最も広い面積を占めている。本カンキツ園は、天敵昆虫利用による害虫防除、草生栽培などの環境を考慮した栽培技術の改良、高品質果実生産などの各種研究の場として盛んに利用されるとともに、主要な教育実習の場ともなっている。

通年実習では、水稲、茶、花卉、果樹などを対象として、多様な学習ができるように実習項目が用意されている。しかし、これらの項目だけでは、植物の生育や作業の連続性が感じ取りにくく、作業の結果を見ることも少なくなりがちである。そこで、静岡県らしさがみられ、豊富な実習材料が供給できるカンキツ園での実習プログラム「私のミカン」が工夫された。

このプログラムでは、学生自ら、温州ミカン1樹を選び、開花から収穫まで、施肥や摘果など、ほとんど全ての管理と生育の様子の観察ができ、その作業などに必要な時間は通常の実習内に20~30分間組み込まれている。プログラムの進行とともに、自分の実習内容を反省、工夫し、積極的に作業する様子が見られ、また、植物に継続的に触れることでその生命力に感動し



実習プログラム「私のミカン」



お互いのミカンの食べ比べ



美味しいミカンができたかな!?



一番美味しかった人には表彰!!



子供たちにもミカンのあれこれを教えています!!

たり、適宜、試食していくことで果実の生育・成熟の経過を実感できるなどの点でも大きな効果が上がってきている。今後も、当センターの特徴ある実習プログラムとしてアピールできるようより良い「私のミカン」を育ていきたいと考えている。

なお、カンキツ園は、幼稚園児、小学生や一般市民のミカン狩りにも利用され、その際に教職員が対応することで地域への貢献にも大いに役立っている。

(住所) 426-0001 藤枝市仮宿 63 番地

(電話) 054-641-9500, (メール) nojojimu@adb.shizuoka.ac.jp



岐阜大学 応用生物科学部
 附属岐阜フィールド科学教育研究センター

<http://www1.gifu-u.ac.jp/~gufarm/>

養鶏施設の紹介



育雛施設



従来型ケージ



エンリッチドケージ



平飼い方式

多様な飼育施設

2020年度文部科学省概算要求(施設整備)に採択され、従来の畜産施設を最新式のものに建て替え、2022年より運用を開始しています。初生雛から成鶏までの一貫飼育を行っています。成鶏の飼育では、

- ①日本で最も普及している「従来型ケージ」
 - ②動物福祉に配慮した「エンリッチドケージ」
 - ③最も鶏の自由度が高い「平飼い方式」
- の3種類の飼育方法を採用しています。

採卵鶏に関して多様な飼養設備を整備し、高い教育効果と実験利用に活用されています。総飼養羽数は成鶏1200羽で、毎日生産される鶏卵は学内と近隣スーパーで販売しています。

防疫対策



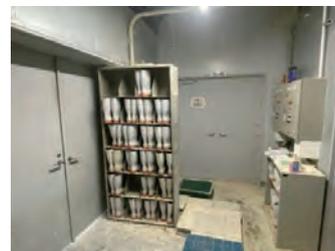
石灰散布風景①



石灰散布風景②



更衣室風景



専用長靴への更衣

防疫対策

昨今、冬季に家禽類への鳥インフルエンザの発生が続いています。岐阜大学では、以下の対応を行っています。

- ①鶏舎周辺への消石灰の散布
- ②鶏舎専用衣服と専用靴の着用
- ③鶏舎入場時の手指の消毒と靴の消毒
- ⑤吸気口へのフィルターの取り付け

実習教育や見学は4月から10月までの利用とし、11月から3月の期間は防疫対策として担当職員だけの入室に制限しています。

本学の教育・実験施設で鳥インフルエンザが発生した場合、近隣の大手養鶏業者を含め関係各所に大きな影響を及ぼすため、細心の注意で発生予防に努めていきます。

連絡先

〒501-1193 岐阜市柳戸1-1
 国立大学法人東海国立大学機構 岐阜大学
 応用生物科学部 附属岐阜フィールド科学教育研究センター
 事務部 TEL 058-293-2971 FAX 058-293-2977

有機質肥料連用試験圃場

東郷フィールドでは1987年に開設された各種有機質肥料の長期施肥連用試験圃場を現在まで37年余にわたり継続管理している。本圃場は1区画面積約50m²(3m×17m)の7試験区からなり、もともとは粘土質のやせた黄色土であったが、有機質肥料連用区では土壌有機物の蓄積を示す作土層の明確な暗色化とともに土壌の理化学性、物理性に改善が認められている。作付けは現在春作、秋作の2回、スイートコーン、ハクサイをそれぞれ栽培しており、収量や病害発生状況などを経年的にモニターし、施肥管理と作物生産性の関係についてのデータを蓄積している。

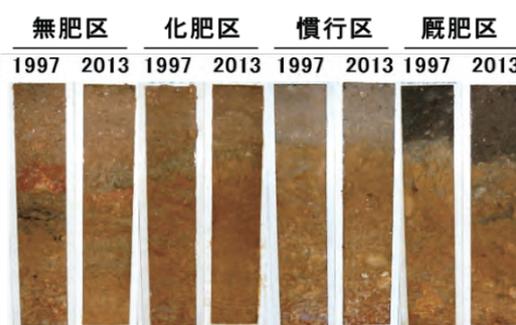
日常的な管理は技術職員が行い、定植・収穫作業は東郷フィールドの教職員・学生や関連研究室の教員・学生のほか、退職教職員、卒業生が参加して協同で実施し、収穫物の食味試験も楽しんでいる。圃場管理の一部は学部3年生の実習に取り入れ、施肥管理と作物生育との関係を実体験する格好の場となっている。また土壌は、現場での簡易診断や実験室での化学分析の実習にも用いられ、全学部学生の教育に活用されている。

本圃場には、産学連携を含めた複数の有機質肥料施肥区があるほか、通常量以上の有機肥料を施肥する試験区があることが1つの特徴で、研究資源としても貴重である。その特徴を活かし、土壌有機物の蓄積や形態変化、土壌微生物の生態・機能などの研究に学内外で活用されている。また、同一圃場内で生育状況の大きく異なる作物が同時に存在する利点を活かし、ドローンを用いた画像解析による作物生育のモニタリングやモデル化の研究も行われている。

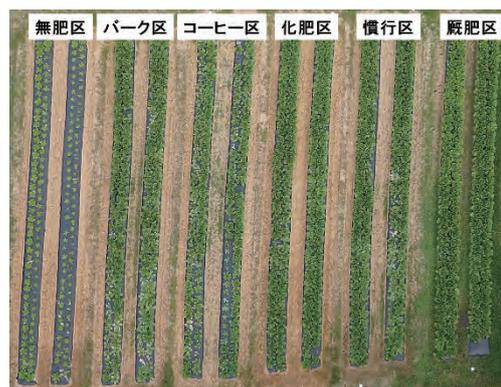
試験区の概要

	化学肥料	有機質肥料(1作あたり)
無肥料区	—	—
化学肥料区	+	—
慣行区	+	牛糞厩肥 2 t/10 a
厩肥多施用区	—	牛糞厩肥 10 t/10 a
コーヒー粕区	+	コーヒー粕堆肥 2 t/10 a
パーク堆肥区	+	パーク堆肥 2 t/10 a
食品排水汚泥コンボ区	—	食品排水汚泥堆肥 3.5 t/10 a

パーク堆肥区は、2004年度までクロレラ堆肥を施用



無肥区、化肥区、慣行区、厩肥多施用区の土壌断面（モノリス）



定植1ヶ月後のハクサイの生育状況のドローン撮影写真

名城大学

農学部附属農場 (生産分野：作物・果樹・蔬菜・花卉・造園・畜産)
 フィールド生産科学研究室 (研究分野：果樹・蔬菜・花卉・畜産)

多くの遺伝資源を有し、実践的な教育研究を担う総合型農場
 約13 haのうち約10 haを畑、水田、果樹園、牧草地、放牧地、見本園に利用
 教育

- ・農場実習 (作物・果樹・蔬菜・花卉・畜産、年間約300名受講)
- ・学部/大学院講義 (年間約400名受講)
- ・食品加工実習や生物環境科学実習など
- ・卒業/修了研究

研究

- ・異分野融合したフィールドレベルでの研究
- ・学内外組織との共同/受託研究

環境

- ・耕畜連携による農場内資源の循環活用
- ・循環式トイレの利用

社会貢献

- ・春日井市と連携「アグリサイエンス講座—農と生物のチカラ—」(年5回開催)
- ・農場体験イベント・公開講演会・田植祭・収穫祭・見学/遠足の受け入れ



Pick up! 畜産分野

生産

- ・ヤギ：乳用種の日本ザーネン種・日本在来種のシバヤギ
- ・ニワトリ：シュリアライト(白色卵殻)・ボリスブラウン(褐色卵殻)
 名古屋・烏骨鶏・さくら・もみじ・岡崎おうはん
 岡崎アロウカナ・蓑曳鶏(みのひきどり、国指定天然記念物)



教育

- ・農場実習：日本ザーネン種での乳生産、採卵鶏での卵生産、蓑曳鶏の孵化/育成などを通じた飼養管理
- ・畜産食品原料学：乳・肉・卵について家畜生産から消費/加工での現状と課題を示し、課題解消策を考査
- ・フィールド生産科学実験：試料の窒素含有量測定
- ・動植物生産科学特論・II：動物の栄養、飼料栄養価の評価

研究 (一部は国内外の大学や研究機関と共同実施)

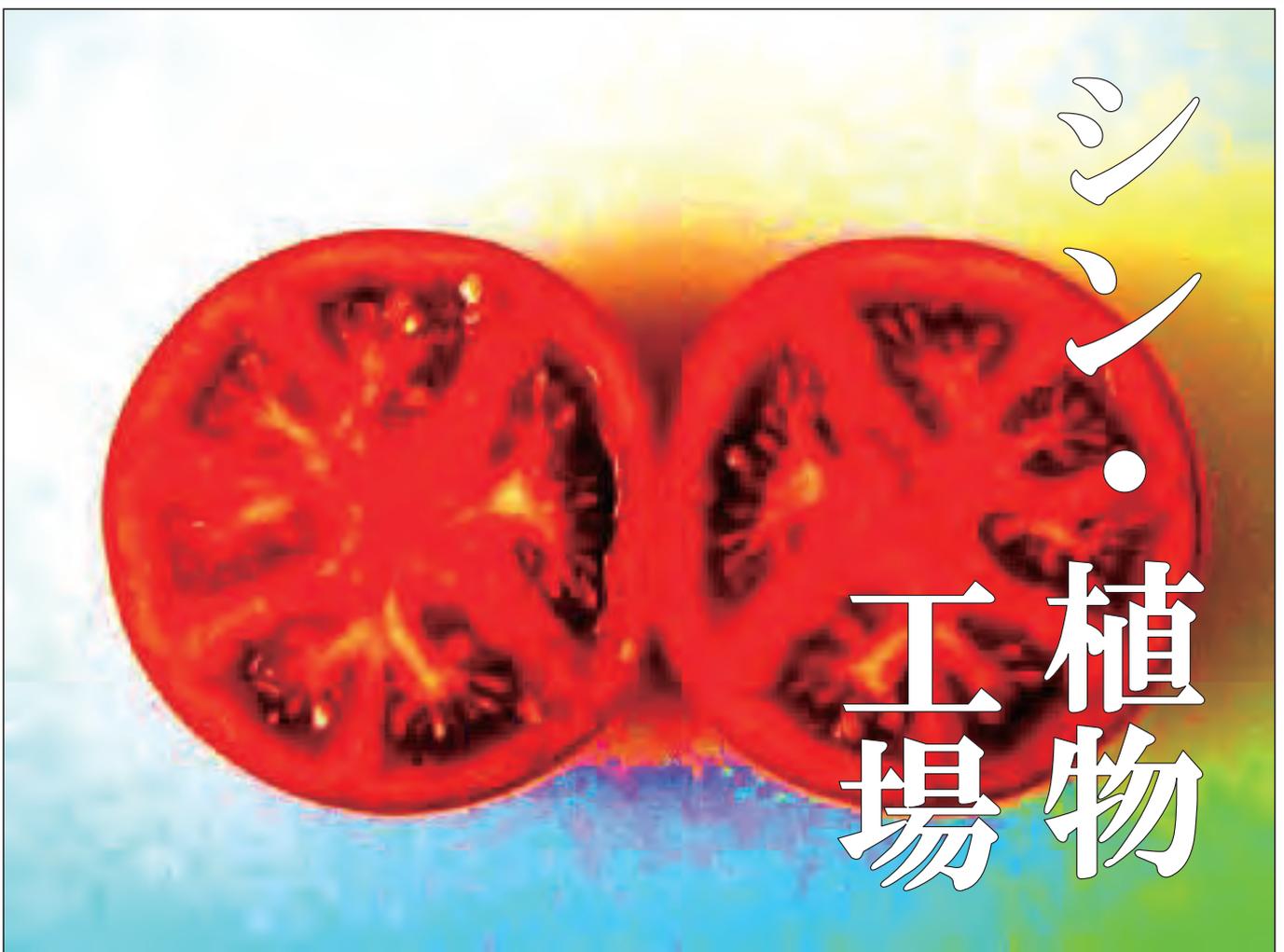
- ・カロテノイド蓄積昆虫の開発と飼料活用
 —高機能な鶏卵生産システム構築—
- ・未利用飼料資源が反芻家畜の飼料利用性、生産性および畜産物に及ぼす影響の解明
- ・熱帯での家畜生産性向上のための飼料資源の探索と利用性の解明



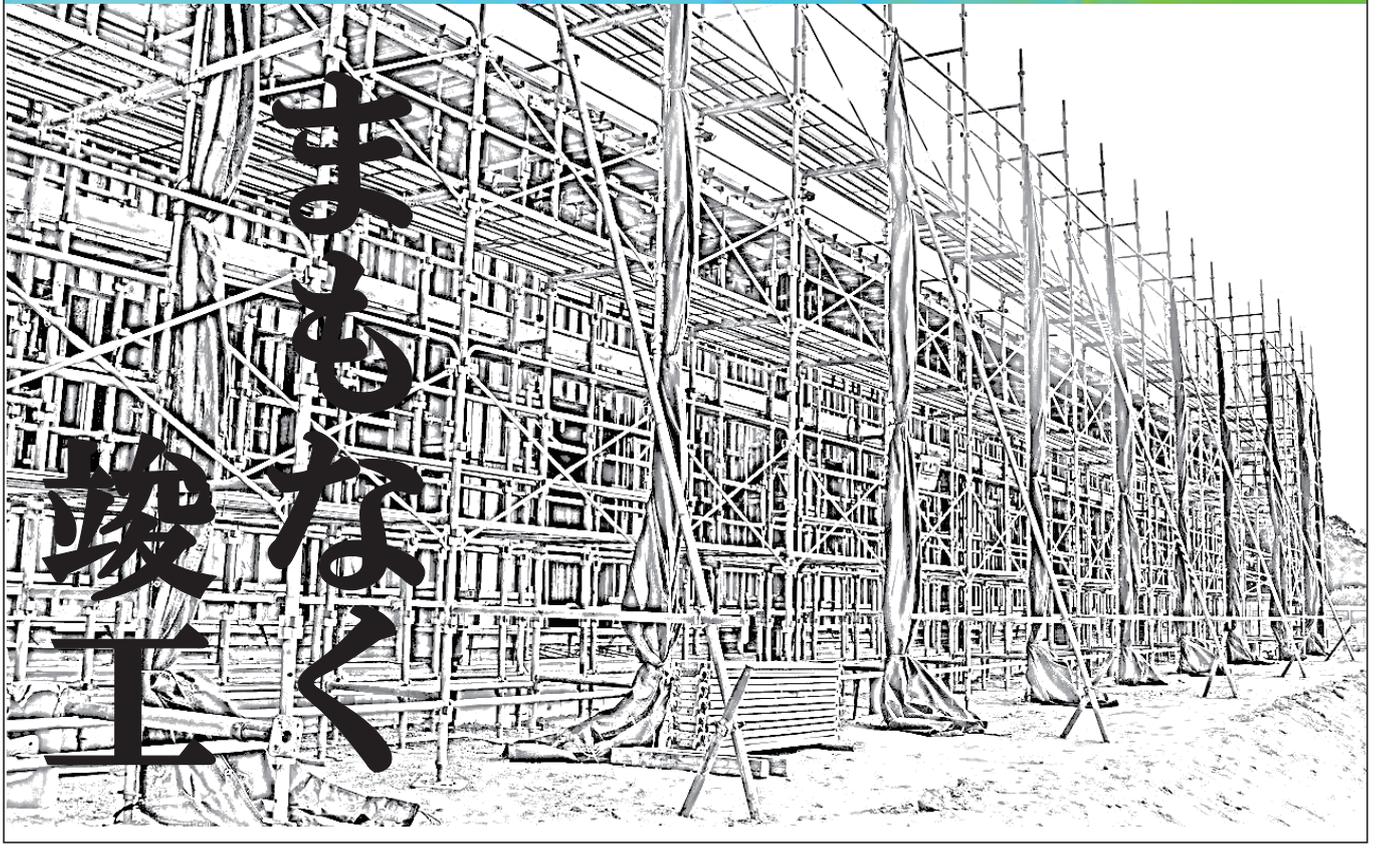
MEIJOth
 MEIJO UNIVERSITY 1926 - 2026

名城大学 (春日井キャンパス) 農学部附属農場
 〒486-0804 愛知県春日井市鷹来町菱ヶ池 4311-2
 Tel: 0568-81-2169 Fax: 0568-81-1589

研究室HP: <http://www-agr.meijo-u.ac.jp/cgi-bin/farm/index.html>



シン・植物工場



まもなく竣工



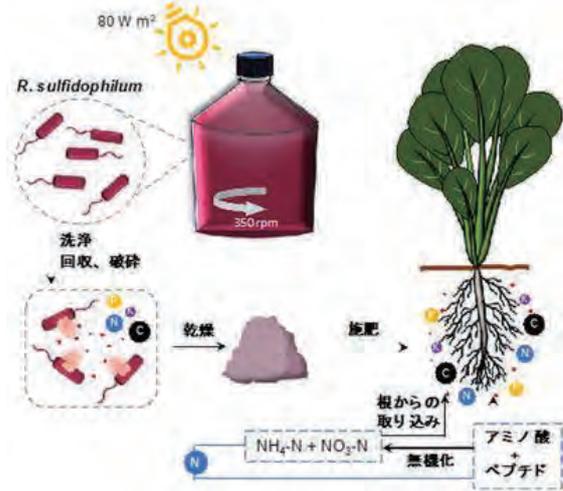
京都大学大学院農学研究科附属農場 Experimental Farm, Kyoto University

京都大学大学院農学研究科附属農場は、2016年4月にけいはんな学研都市木津中央地区（京都府木津川市）に移転しました。新農場では、食料・環境・エネルギー問題の解決に向けた次世代の農業技術の開発と実証のための研究に取り組んでいます。また、最先端の農業生産施設と設備を活用しながら、本学の学生だけではなく他大学・他学部の学生を対象とした実習教育の場を提供しています。農場内には同研究科植物生産管理学分野および栽培システム学分野の研究室があり、大学院生、学部生が様々な研究に取り組んでいます。

JST 共創の場形成支援プログラム（COI-NEXT） ゼロカーボンバイオ産業創出による資源循環共創拠点 に参画しています

空気中の窒素を固定することができる光合成細菌に由来する持続可能な新規有機質肥料の農業生産における有効性を検証する共同研究を進めています。

通常、無機窒素肥料はハーバーボッシュ法を用いて大量のエネルギーを消費して製造されます。しかし、大気中の窒素と二酸化炭素を固定することができる光合成細菌を利用して窒素を固定し、これを肥料として活用することで、持続可能な代替窒素肥料を提供し、農業のゼロカーボン化に貢献できる可能性があります。これまでにコマツナを用いた試験により、光合成細菌由来の肥料が植物の窒素源として有効であることが確認され、その結果をまとめた論文が発表されました（Shamitha et al., 2024）。さらに、この肥料の圃場スケールでの有効性についても検証を進めています。



〒619-0218 京都府木津川市城山台4丁目2番地1

TEL: 0774-94-6405 E-mail: a60noujo@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

蚕糸資料ギャラリー

— 貴重な養蚕関連資料を展示 —

京都工芸繊維大学は、前身である明治 32(1899)年に京都蚕業講習所が開設されて以来、養蚕を中心とした蚕糸生産に関わる科学技術の教育と発展・振興を担ってきました。120 年を越える中で利用された教育資料や研究成果と、本学元教授の一田(高濱)昌利氏からの寄贈資料とを整理し、一般に展示・公開する「蚕糸資料ギャラリー」が 生物資源フィールド科学教育研究センター(嵯峨キャンパス)に開設致しました。

展示資料には、昭和初期から戦前に使用されていた秤や顕微鏡、大正初期～昭和初期に収集された野蚕を含む世界各地で生産された生糸標本、昭和初期～平成初期に実施された繭形質に関する実験標本、昭和中期制作の育蚕教育模型などが含まれ、日本の養蚕学を知る上で学術的にも貴重なもので構成されています。



蚕糸資料ギャラリー展示資料： 繰糸器など各種養蚕機材(左)と 各種標本模型(右)

本学学生の養蚕関連実験・実習や博物館実習における教育資料や蚕糸学の研究資料を提供すると共に、センター主催の親子体験教室や小中高等学校との連携教育事業等の実施を通じた地域貢献に深く寄与しています。(※なお、見学には事前の問い合わせが必要です。)

連絡先 〒616-8354 京都市右京区嵯峨一本木町 1
TEL: 075-861-0714 e-mail: cbfs@kit.ac.jp
<https://www.cbfs.kit.ac.jp>



京都府立大学農学食科学部附属農場

田植えから餅つきまでの実習で農と食の感動を

私どもの附属農場は、もち米の栽培から加工利用までの過程を体験することで、農と食の素晴らしさを実感できる実習プログラムを組んでいます。4月に種もみの催芽から始まり、5月に田植え、10月には稲刈りを行います。田植えは手植えと機械植え、稲刈りは手刈り、バインダー、コンバインの全てを経験することで、機械化一貫体系が稲作農家を重労働から解放した歴史を追体験します。そして年末には、杵と臼による餅つきです。せいろで蒸し上がったもち米を臼に移し、冷めないうちに素早くつきあげるには、つき手とかえし手の連携が欠かせません。上級生の手作りの料理とともに味わうつきたての餅の美味しさはひとしおです。附属農場がある精華キャンパスには、農場担当以外の研究室もありますが、餅つきにはキャンパス全体の学生と教職員を招待して感動を分かち合います。かつて、農村の年末には当たり前にあったこんな風景を実体験できる場を提供することは、座学の講義ではできない、農場教育ならではの醍醐味ではないでしょうか。



〒619-0244 京都府相楽郡精華町北稻八間大路 74 Tel.0774-93-3251 kpufarm@kpu.ac.jp

大阪公立大学農学部 附属教育研究フィールド

地の利を活かす！都市型フィールド

政令指定都市堺市に立地する大阪公立大学中百舌鳥キャンパスにあります。大都市、キャンパス内農場として、学内の関連教育研究領域、関西圏の教育研究機関、食農産業と連携し、質の高い実習教育、知財、高度先端技術を提供しています。また、都市に住む小中高生が実体験を通じて「生命」、「食」、「農」、「環境」に関する意識を高めることのできる次世代教育を目的とした食農プログラムを提供しています。



実習教育 2科目4単位



近隣小学生への食育教育
田植期、稲刈り期の2回開催



産学連携 スマートグリーンハウス
「作物の栽培レシピ作成」



研究の場 水田 80%での実証栽培



探Qみらいファーム
大阪公立大学×読売新聞「農プロジェクト」
小学生 計10回の農業体験

問い合わせ先

〒599-8531
堺市中区学園町1-1
Tel: 072-254-9400 (農学部支援室)
Mail: gr-agri-fieldmanager[at]
omu.ac.jp
※[at]を@マークに。研究委託、試験栽培、評価委託などのご用件は本学の産学官連携機構へご相談下さい。

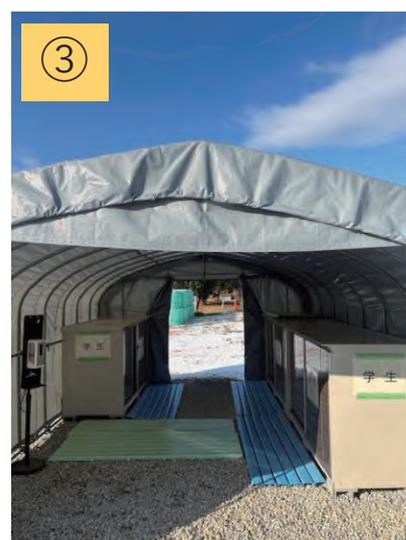
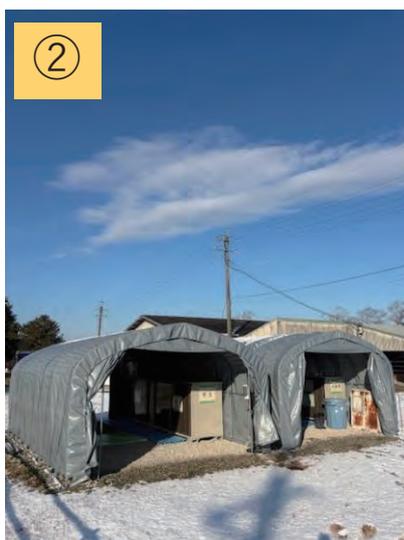
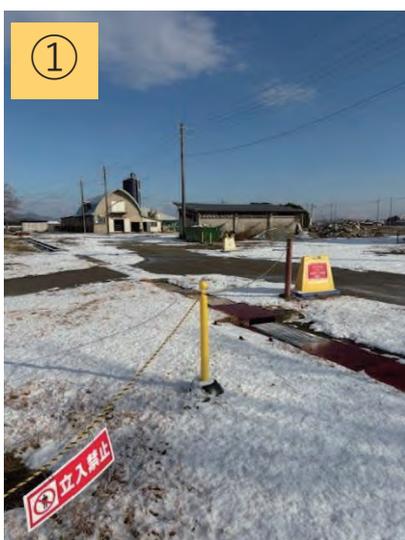
<https://www.omu.ac.jp/agri/field/>

2024年、当センターでは家畜防疫に関わる**飼養衛生管理区域**を設定し、**飼養衛生管理マニュアル**を完成させ、4月より施行を開始しました。

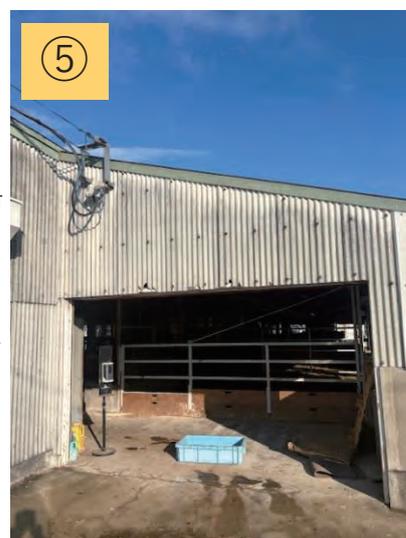
センター内でのルール作りでは多くの意見が出されて集約するのに時間がかかりましたが、最終的には12ページのマニュアルにまとめられました。

これによってこれまで曖昧だった防疫のためのルールが明瞭になり、**職員も学生を含めた来場者もルールをしっかりと守るようになりました。**

しかし、これから改善していかなければならない点はまだ残されています。大学の附属農場としてしっかりとした取り組みを今後も続けていきたいと考えています。



- ① 境界線にトラロープを設置
- ② 出入口となるパイプ倉庫
- ③ パイプ倉庫の中 (1)
左右の物置には専用長靴や防護服などを常備
- ④ パイプ倉庫の中 (2)
外来者には記帳のうえフローチャートにしたがって入場してもらう
- ⑤ 牛舎の入口には手指消毒器と踏み込み消毒槽を設置



近畿大学附属農場(和歌山県湯浅町)

～産官学連携により誕生した新商品

”赤ワイン梅酒”と”とろっとマンゴー”～

赤ワイン梅酒 近畿大学×湯浅町×和歌山湯浅ワイナリー



農学部の学生が収穫・選別した南高梅を使用したお酒を産官学連携により開発しました。この取り組みは、近畿大学と湯浅町が令和4年に締結した包括連携協定の一環として実施しており、湯浅町のふるさと納税返礼品としても提供しています。

とろっとマンゴー

近畿大学×高垣酒造

天保11年創業の地元老舗酒蔵と協働し、近大マンゴーを使用したリキュールが誕生しました。農学部の学生が管理・収穫・出荷作業に携わり、加工品として広く一般に販売することで、37年にわたるマンゴー研究の成果を社会に発信しています。



所在地

〒643-0004 和歌山県有田郡湯浅町湯浅2355-2

TEL (0737) 62-2953

<https://www.kindai.ac.jp/farm/>

X



Instagram



龍谷大学 農学部牧農場

— 「食の循環」から農をとらえ、地球的課題の解決を図る —



TOPIC 1 アグリ DX 人材育成事業 —低炭素社会の実現に向けた食料システムの構築—



本事業では、農学部と先端理工学部の協働により、「食と農」に関わる産業のデジタル化の駆動力となる人材を養成するための実習を構築することを目的としています。「GNSS 自動操舵トラクター」「生育調査用ドローン」「資材散布用ドローン」や、気温、水温、EC、土壌体積含水率等の各種プローブや温暖化ガスの「モニタリング機器」を農場に配備することで、これまで限られた面積の個体群に係る管理作業や調査実習に留まっていた学びを、短時間で効率的・広範囲に調査できるスキルを教示することで、データ駆動型の栽培管理技術の学びへと実習を転換していきます。また、これら農業 IoT 機器等から得られたデータを整理・分析・可視化することができるデジタルマインド・スキルを学びます。

TOPIC 2 持続可能な食循環プロジェクト —オリジナル小豆粥の開発—



地域に貢献できる研究・教育を目指す「持続可能な食循環プロジェクト」として、石山寺瀬田川湖畔に店を構える日本料理「新月」とのコラボレーションにより、オリジナル小豆粥が誕生しました。農学部牧農場（大津市牧地区）で環境に配慮して栽培した「龍谷米」と大粒の大納言小豆を使用し、日本料理「新月」監修のもと、上品な味わいに仕上がりました。この取り組みは、農場で学生が栽培・収穫した作物をどのように付加価値のある商品として販売するのかという一連の流れを学ぶ機会として企画されたプロジェクトです。新たな地域資源の創出と農業の6次産業化へつなげ、地域の活性化を目指しています。

TOPIC 3 牧農場・堂農場へようこそ

農場特設サイトでは、学生や教員の教育研究活動や地域との連携活動など、リアルな様子を発信しています。瀬田キャンパス近くの教育用圃場の牧農場と、研究用圃場の堂農場で行われている日々のニュースや特徴的な研究活動を、動画も多用しながら発信しています。

〒520-2194 大津市瀬田大江町横谷 1-5 Tel : 077-599-5601

E-mail : agr@ad.ryukoku.ac.jp

URL : <http://www.agr.ryukoku.ac.jp/>



鳥取大学農学部附属フィールドサイエンスセンターは、1920年（大正10年）鳥取高等農学校に実験実習農場が設置されたことに始まります。1966年（昭和41年）の鳥取大学の統合移転に伴って現在の湖山キャンパスに移り、2005年（平成17年）に既存の附属農場と附属演習林を統合してフィールドサイエンスセンターになりました。農地や森林などのフィールドを活用した教育と研究を高度に実践すること、そして農学部における総合的なフィールド科学および学術研究の情報発信基地としての機能を担うことを目的としています。農業関連の教育研究は鳥取キャンパス内にある湖山農場（12 ha）と近隣にある大塚農場（6 ha）で行われています。

教育：地域特産作物を含む、多作目に触れることができる農場実習

- 湖山農場では、水稻4品種、畑作物10作目、ハウス野菜8作目、花卉18作目、果樹4作目を栽培し、学生が多様な作物種に触れるとともに、鳥取大学が開発した農業技術も体験できる実習を実施。
- 地域特産作物である白ネギの機械による調製実習、ラッキョウの栽培から加工までを組み込んだ体験実習、播種から収穫まで自主管理する枝豆栽培などの特徴的なプログラムで実習を高度化。
- 大塚農場では、鳥取大学が育成した二ホンナシ6品種（秋栄・瑞秋・早優利・爽甘・瑞鳥・優秋）を含む17品種の栽培&遺伝資源の保存を行って、実習に活用するとともに研究も推進。



鳥取大学が開発した紙マルチを用いた特別栽培米の田植え



有機栽培したラッキョウの収穫作業



洗いラッキョウの調製作業（根切り）



大塚農場での二ホンナシの摘果作業

研究：地域農業の軽労化に役立つ農作業機械の開発

- ナシ、ラッキョウ、シバなどの地域特産物は機械化が不十分な一方で、生産者の高齢化が進んでおり、軽労化に役立つ農作業機械の開発が求められています。これまでのシバ収穫機に加えて、新たに『洗いラッキョウ調製機』を開発しました。



開発した『シバ収穫機』



開発した『洗いラッキョウ調製機』と作業風景



産官学による共同研究で開発し、市販開始！

地域貢献：地域の子供の「農」と「食」に対する意識を育む

- 教員 & 技術職員による『あぐりスクール』を毎年開講。子供とその保護者が一緒に作物を育て、自分達で世話をした農作物を食べることによって、農と食について知る機会を提供しています。



〒680-8553 鳥取県鳥取市湖山町南4丁目101番地

TEL : 0857-31-5600, FAX : 0857-31-5601

E-mail : ag-fsczim@adm.tottori-u.ac.jp

URL : <http://muses.muses.tottori-u.ac.jp/facilities/FSC/index.html>



島根大学オリジナル有機質肥料「キャンパスト」を 利用した生産物生産にむけて

生協食堂の食品廃棄物から有機質肥料を製造 —島根大学食品ロス・ゼロ宣言プロジェクト—



島根大学生物資源科学部では、令和3年度から「島根大学食品ロス・ゼロ宣言プロジェクト」として、島根大学生協食堂から排出される年間約10トンの有機性廃棄物（食品廃棄物）の減容化と肥料化に取り組んでおり、当センター研究室と民間企業で共同開発した装置により、食堂の食品廃棄物から年間約2トンの有機質肥料を製造することができました。当センターの本庄総合農場において、この肥料効果と安全性を確認し、島根大学オリジナル肥料「キャンパスト」として販売を開始しています。



オリジナル有機質肥料を用いた生産物生産 —オリジナルブランド化&目に見える物質循環—



今年度、オリジナル有機質肥料「キャンパスト」を用いてイネおよびサツマイモを栽培したところ、良品の収穫物を得ることができ、本肥料の実用性が確認できました。今後は、この肥料を用いて栽培した「キャンパスト生産物」のブランド化を目指すとともに、そのキャンパスト生産物を学食のメニューに利用してもらうことによって、目に見える形での物質循環を提示することで学生のSDGzへの意識を醸成することに繋がりたいと考えています。



連絡先：島根県松江市上本庄町 2059

TEL: 0852-34-0311 Email: lif-honjo@office.shimane-u.ac.jp



OKAYAMA
UNIVERSITY

国立大学法人岡山大学

農学部附属山陽圏フィールド科学センター

岡山県内に岡山農場，八浜農場，津高牧場と総面積49.4haに及ぶ広大な敷地を設け，大規模に実際の運営が行われている生産現場で，作物栽培と家畜飼養の基礎と専門を修得させることを目的としています。研究面では，自然の栽培条件下での実験を必要とするフィールド科学に広く活用されています。

岡山農場



高軒高ハウス

ブドウ園



概要

岡山農場は農学部隣接する好立地条件が特徴で，農学部の授業終了後，すぐに農場まで移動して実習を受講できるのが特徴です。桃，ぶどうなどの果樹の他に，イチゴ，トマトをはじめとした様々な野菜栽培の実習を行っています。また農場内に設置された販売所で生産物の販売を行っています。

生産・教育

「『みどりの食料システム』に貢献する高度DX人材育成プログラムの開発」のもと，直進性制御GPSトラクターや，高軒高ハウスの導入により省力生産技術を追求しています。また学生にとっては，最新のイチゴ・トマト・果樹栽培を体験する貴重な場となっています。



自動操舵トラクター



コンピュータ制御によるイチゴ栽培



ブドウの樹上音響果実熟度判定



トマトの多収生産のためのパラメータ測定

研究

企業等とも連携しながら，複合環境制御装置の開発や果実品質測定装置の利用方法の開発など最先端の研究開発を行っています。高軒高ハウスで効率的なトマト生産のためのパラメータ測定を行ったり，ブドウで樹上で熟度を判定することを試したり，これからの農業生産をリードしていくことを目的とした研究開発を行っています。

連絡先：岡山市北区津島桑の木1-62
TEL:086-251-8392
ree8392@adm.okayama-u.ac.jp

公式HP：

公式X：



広島大学生物生産学部の 食農環境教育研究施設

広大農場紹介の
YouTube動画



他大学・自大学
農学系・情報科
学系学部生
スマート酪農
科学演習

他大学・自大学
非農学系学生
命の尊厳を涵養する
食農フィールド
科学演習

他大学・自大学
農学系学生
酪農フィールド
科学演習

他大学・自大学
学生
農場の四季を通して生
命のサイクルを体験す
る食農フィールド科学
演習

幼稚園・保育園の
教員、初等教育者
保育・初等教育の
ための食育フィールド
科学演習

家畜の福祉・食の安全・生産環境に配慮し、
スマート技術とともに発展する酪農の教育を
様々な学生のニーズに合わせて提供します！

留学生
Animal Science and
Technology



家畜とのふれあい



搾乳実習



牛乳の試飲



搾乳ロボットの見学



肉牛の放牧管理



飼料作物実習



飼料給与



課題発表会

〒739-0046 広島県東広島市鏡山2-2965
連絡先 電話:082-424-7972 e-mail:fscfarm@hiroshima-u.ac.jp



県立広島大学 生物資源科学部附属 フィールド科学教育研究センター

2021年4月から県立広島大学庄原キャンパスで人工光植物工場が稼働を開始し本年度で稼働3年目を迎えました。稼働初期はリーフレタス、ベビーリーフのみをデパ地下で販売していましたが、今年度から栽培品目の拡大に取り組み、エディブルフラワー、フルーツの栽培試験を卒論テーマとして始めました。エディブルフラワーでは矮化方法を検討し、複数種類の花を開花させることに成功しています。今後はベビーリーフにエディブルフラワーを添え、新たな商品としての販売を目指していく予定です。既存の製品での販売は、これまで販売が難しかった大学近郊での販売として道の駅で販売を開始し、近くのスーパーで行われる催事での販売も行うようになりました。



大学近郊での販売



催事での販売



エディブルフラワーの栽培

〒727-0023
広島県庄原市七塚町5562
TEL 0824-74-1844
Email yu-tanigaki@pu-hiroshima.ac.jp

NEWS

2024年度

天然記念物「見島ウシ」の子ウシが生まれました

2024年6月15日夜、山口大学農学部附属農場において、天然記念物“見島ウシ”の子牛「はぎのつむぎ」が誕生しました。山口大学では、萩市からの協力要請を受けて、2020年度から“見島ウシ”分散飼育に係る業務委託契約を締結し、附属農場において対象牛（名前：はぎのさぎり）の飼育を開始しました。その後、人工授精による繁殖に取り組み、2022年5月には子牛（名前：はぎのすずらん）が誕生し、親子2世代の飼育をしてきました。この度、「はぎのすずらん」への人工授精により誕生した「はぎのつむぎ」は三代目にあたります。今後も、「幻の牛」とも呼ばれる見島ウシについて、萩市との連携により山口大学が責任を持って飼育することにより、地域の課題に貢献していきます。



生まれた子ウシ（はぎのつむぎ）と見守る母ウシ（はぎのすずらん）

農場生産物を返礼品とした寄附募集を実施中

山口大学基金における寄附や「学生修学支援」において、農場実習で学生・教員・技術職員が栽培した旬の新米や野菜、果物を返礼品とした寄附募集を行いました。ご寄附は、学生の修学支援と附属農場の教育環境の充実に活用します。また農場では、農産物の「サブスクリプションサービス」という新しい流通形態を学ぶ機会として学習にも役立っています。



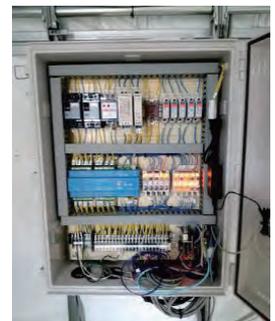
返礼品例1「新米5kg」



返礼品例2「秋野菜アラカルト」

農場DX実習を開始しました

山口大学は、文部科学省「デジタルと専門分野の掛け合わせによる産業DXをけん引する高度専門人材育成事業」に採択され、その一環として、DX技術を活用した農場実習する「デジタルファーム学修プログラム」開始しました。これまで、デジタルデータを収集・蓄積・分析するための設備・機器およびスマート農業関連の最新機器類を導入し、これらを活用した教育カリキュラムの開発や実験・実習の高度化に取り組んでいます。



導入した機器の例「スマートイチゴハウス」

【問い合わせ】

山口大学農学部附属農場 ag297@yamaguchi-u.ac.jp 083-933-5923

徳島大学生物資源産業学部農場 実習農場で生産される農産物の活用

徳島大学生物資源産業学部では、1次産業、食料、生命科学に関する幅広い知識と、生物資源の製品化、産業化に応用できる知識と技術を有し、生物資源を活用した新たな産業の創出に貢献できる人材の育成を目指しています。本学部農場では、水田、畑、果樹園、家畜などを利用した実習と研究が数多く行われています。ここで生産されるジャガイモ、サツマイモ、スダチ、お米などの農産物は、学生実習やオープンキャンパスなどの学内の教育イベントを通して学生に提供されています。また、大学生協を通して販売されるものもあります。

<ジャガイモ>

ジャガイモ（メイクイン、ダンシャク）は、毎年2月ごろに種芋を植えています。5月下旬～6月初旬の学生実習（生物生産システムコース2年生）にて収量調査を行い、収穫物の一部は、学生や学内フードバンクに寄付してきました。



<スダチ>

毎年8月中旬～9月下旬の暑い時期に収穫しています。初どりのスダチは、生物資源産業学部オープンキャンパス参加のお土産として無料配布しています。



<お米>

精米して大学生協にて販売しています。一人暮らしの学生用として、450g（3合）サイズにしています。



徳島大学
生物資源産業学部
FACULTY OF
BIOSCIENCE & BIOINDUSTRY
TOKUSHIMA UNIVERSITY

徳島大学生物資源産業学部農場（石井キャンパス）
〒779-3233 徳島県名西郡石井町石井字石井 2272-2
連絡先（生物資源産業学部事務課総務係）：

TEL 088-656-8019, FAX 088-656-8029

E-mail : bb_gene_chief@tokushima-u.ac.jp

香川大学農学部附属農場

『地域の生涯教育を担って』

地域における生涯教育を担う場所として、子どもから一般成人まで幅広い世代を対象に、農学部附属農場を活用した農業体験や家庭菜園教室などの取組を実施しています。動植物に触れること、自然を感じることに驚き、そして楽しむことができるように工夫しながら行っています。

1. 園児

近隣の幼稚園や保育園から10名～40名の園児が来て、田植えと稲刈り、茶摘み、イモ掘り、ミカン狩り、動物との触れ合いなどの農業体験を行っています。
(写真は左から茶摘み、田植え、稲刈り)



2. 小学生

年に1回、附属小学校の5年生35名程度が農業体験学習にきています。作物、野菜、果樹の栽培管理や収穫、家畜の餌やりなどの農業体験とともにクイズを出題して楽しみながら五感で感じるように工夫しています。
(写真はイモ掘りとミカンの収穫)



3. 高校生

近隣の特別支援学校から3名程度の高校生が春と秋にそれぞれ2週間、職場体験として現場実習にきています。作物、野菜、花卉、果樹、畜産の5部門を2日ずつまわり、いろいろな作業を経験してもらっています。卒業生を数年間受け入れることもあります。



4. 一般成人

一般成人を対象として、家庭菜園教室を開いたり、香川大学地域人材共創センターの公開講座を開催したりしながら、農作業の啓蒙に努めています。退職後に家庭菜園に力を入れている人や親子で農に親しむ人が来て、賑やかに実施しています。

<連絡先>

住所:〒769-2304 香川県さぬき市昭和字谷乙300-2
TEL:0879-52-2763, Eメール:afjim-a@kagawa-u.ac.jp



愛媛大学農学部附属農場 大学開放事業「いきいき農場夢体験」



愛媛大学農学部附属農場では、大学開放行事として毎年11月に「いきいき農場夢体験」を開催しています。愛媛県内各地の小学生とその保護者家族が参加し、ミカン狩り、押し花づくり、ヤギの餌やり、鉢植え教室、餅つき、農業機械・作業車の試乗などを行います。講師・スタッフとして、愛媛大学の教員4～5名、職員約10人の体制で安全に留意し、ゲーム性を取り入れながら楽しく「農と食のつながり」が学べるよう取り組んでいます。

参加した子どもたちからの感想は、「ミカン狩りでとても甘いミカンを食べることができた」、「ガーデニングで花をきれいに植えることができた」、「また是非参加したい」などがほとんどでした。保護者からは、「盛りだくさんの内容でとても充実していた」、「普段できないことができ、子どもたちが喜んでいた」、「大人にとっても楽しめる内容だった」、「たくさんの体験は子どもたちの今後に役立つと思う」という高い評価を頂きました。

愛媛県は柑橘類の出荷量と種類では日本一の規模になっていますが、県内の消費者はミカンの樹に触ったことがない人がほとんどであり、またヤギを見る機会も非常に少ない状況にあります。普段、食料品店で見かける食材がどのように生産されているかを見て、触れて、体験できる機会は一般市民にとって非常に貴重であり、食農教育として大変有用であると、教職員も改めて感じることができるイベントになっています。このように愛媛大学附属農場は、貴重な農業教育資源を有しており、今後も農業や食の情報を地域に発信して地域住民に貢献するため本事業を継続したいと考えています。



愛媛県松山市八反地甲498，電話 089-993-1636

nokaikei@stu.ehime-u.ac.jp（農場演習林係）

高知県は園芸農業が盛んであり、一年を通じて温暖な気候を利用した施設野菜の生産、ユズ・ブントランなどの地域特産果樹の栽培が盛んであり、畜産では高知固有の土佐あかうし（褐毛和種高知系）の飼育など個性的な農業が展開されています。



南国フィールド(農場)は高知大学物部キャンパス内にあり講義・研究棟の目の前で農場の各施設が展開されています。総面積 18ha のフィールドには、水田 4.5ha、果樹園 1.3ha、ビニールハウス 0.5ha、褐毛和種高知系約 90 頭を飼養するための畜舎、放牧場管理棟などの他にジュース加工室、実験室など様々な教育研究活動に対応できるように整備されています。学生の皆さんは目の前のフィールドで実践的な学びの場として農場実習などに参加するほか、卒論研究など様々な機会に農場を利用しています。

地域農業の高度化を目指した IoP 事業では本農場は施設園芸における環境計測・制御技術に関わっており、関連する教育・研究が農場内で行われています。農場での教育・研究を通じて、高知県特有の農業事情や最先端の環境制御技術を学ぶ機会、地域課題に関連する研究を行うための場を提供し、地域農業の発展に役立つ高度な知識・技術を有する人材育成を目指しています。

連絡先：〒783-8502 高知県南国市物部乙 200 088-864-5114

HP アドレス：<http://www.kochi-u.ac.jp/agrimar-fs/index.html>



九州大学農学部附属農場は農学部に附属し、農学に関する教育と研究を行う施設として1921年（大正10年）4月に糟屋郡粕屋町原町に約28haを整備して設置されました。その後、1965年に糟屋地方演習林（篠栗町津波黒）の一部に果樹園と放牧場を造成し、1981年には大分県直入郡久住町（現：竹田市久住町）に高原農業実験実習場を設置しました。2021年3月には原町キャンパスから伊都キャンパスへの移転を完了し、同年4月から伊都キャンパスでの教育研究を開始しています。

九州大学附属農場における農学教育

作物、野菜、花卉、果物の栽培や、乳牛(伊都)、肉牛(久住)などの家畜飼養など農業を、「座学+体験」を通じて学びます。講義で学ぶ農学理論がどのように生産技術に結びついているのか、体験を通して理解することを目的としています。

九州大学附属農場伊都キャンパスにおける畜産学教育および研究

現在、家畜生産生態学分野は高原農業実験実習場と伊都キャンパス内の農学部附属農場の2カ所の研究室で活動を行っています。2024年度より伊都キャンパス農場の研究室には新たに准教授1名が着任し、新体制となりました。



【教育】Farm to Tableで家畜衛生、食品衛生に力を入れた実習を展開しています。農場における家畜衛生管理を行い、自分たちで搾乳した牛乳、解体した鶏肉などを利用した食品加工を通して、農場から食卓まで全体で「食」を考える教育を目標としています。

【研究】乳牛やヤギを扱い、家畜を取り巻く環境と生産との関連を軸に、生体内の細菌叢と生産性、疾病の関連を解明する研究、および、飼養管理の効率化に関わる研究などを行っています。



〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡744 アグリ・バイオ研究施設

九州大学農学部附属農場

Tel/ Fax : 092-802-4533

Mail : nonnojo@jimu.kyushu-u.ac.jp HP : <https://farm.kyushu-u.ac.jp/>



SAGA UNIVERSITY
国立大学法人

佐賀大学

農学部附属アグリ創生教育研究センター

唐津キャンパスでは、地域の住民等を対象に様々な化粧品づくりイベントを実施しています。2024年は以下のような取り組みを行いました。

石けんづくり体験 2024年3月:TSUNAGIコンベンション@SAGAアリーナ

佐賀県主催のイベントにおいて、佐賀県イチゴブランド「いちごさん」（品種名：佐賀i9号）の果実から抽出したアロマオイルを添加した石鹸づくり体験会を行いました。高校生や地域住民など多数の来場があり、イチゴの型枠にアロマオイルやイチゴ香料などを添加したイチゴ石鹸づくりを楽しんでいただきました。学生も準備や説明など様々な場面で活躍し、本センターでの化粧品開発などの研究内容や学生の取り組みなど広く理解していただくことができました。



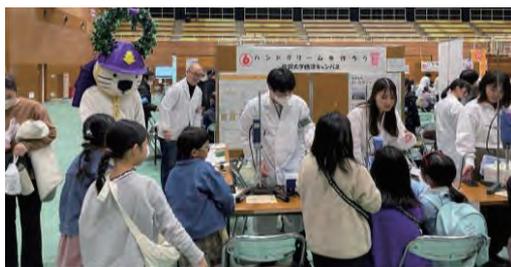
アロマハンドジェル、バスボム、石けんづくり体験ほか 2024年11月:唐津キャンパス一般公開(こども見学デー)@唐津キャンパス

佐賀大学こども見学デーの一環としてアグリ創生教育研究センター唐津キャンパス一般公開を行いました。地域の小中学生ら100名以上の来場があり、研究施設の見学のほか、アロマハンドジェルやバスボムづくりなど様々な実験体験を行いました。食品の味や硬さの測定実験なども行い、子供たちに実験への興味を持っていただくとともに、地域の方にセンターでの教育・研究について知っていただく機会にもなりました。



ハンドクリーム作り体験 2024年12月:みんなの科学ひろば@唐津市文化体育館

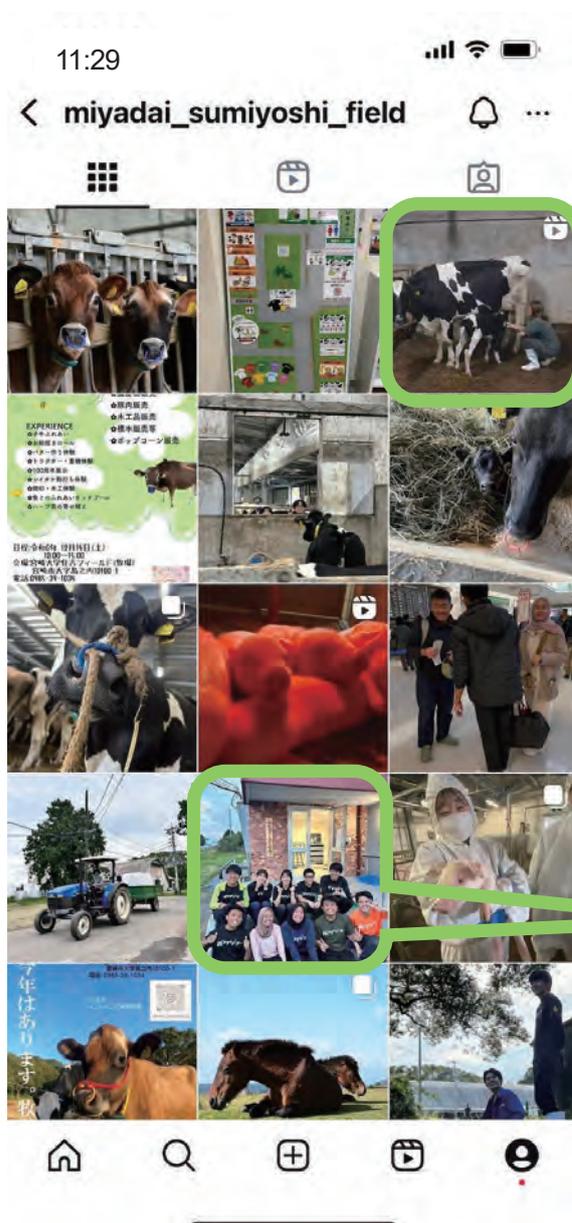
唐津市内の体育館で開催された市内高校・大学・企業などによる科学体験会に出展しました。センターではハンドクリームづくり体験を行い、市内小学生を中心に100名以上の来場がありました。乳化や香りづけ、瓶詰めなど一連の流れを体験いただき、センターでの研究を身近に感じていただくことができました。



連絡先: 〒849-0903 佐賀県佐賀市久保泉町下和泉1841
佐賀大学農学部附属アグリ創生教育研究センター TEL 0952-98-2245

附属住吉フィールド（牧場）のInstagram開設

住吉フィールドでは、本学の学生をはじめ、他大学の学生や社会人・畜産関係者、海外からの留学生が多く訪れ、実習を通し、畜産に関わる多くのことを学んでいます。その実習の様子や、家畜（乳牛・肉用牛・豚）について、より多く知ってもらうために、附属住吉フィールドでは、2023年6月からInstagramのアカウントを開設し、写真・動画を投稿しています。見どころは、職員や学生たちが撮影した家畜たちの様子や、実際の実習現場です。これまでの投稿数は800を超え、フォロワー数は700を超えており、本学の畜産関係の学生はもちろんのこと、動物が好きな学生、一般の方々にも楽しんでもらっています。



その日の出来事をアップしています。



留学生との交流の様子もアップしています。この日は、住吉フィールドオリジナルの「ボクジョーTシャツ」で記念写真を撮りました。

「園芸学」「造園学」「自然環境」の3分野からなる環境園芸学部において、環境園芸学を基軸とした分野横断型の実習教育・フィールド研究・社会貢献を行っています。

園芸学分野

野菜、果樹、花卉の園芸植物に係る特性の理解および栽培技術の習得を基軸として、経済性と環境保全を両立できる最新の作物生産技術や生理現象の探求、新品種育成技術などの園芸作物生産に関する多くの知識・技術を学びます。



造園学分野

伝統的な日本庭園や西洋庭園、ガーデニング、エクステリアから広大な自然環境までにかかわる一連の調査、計画、設計、施工、管理、運営を取り扱う造園技術を習得することを目指します。また、生活と環境の質を高めることを目的として、植物や造園・園芸文化を基礎として、社会福祉や環境創造に貢献できる技術を学びます。



自然環境分野

自然環境の営みや成り立ちを深く理解するために、大学が立地する南九州地域が「希少動植物の宝庫」であることを最大限に活かし、教育研究を展開しています。生態的な観点から、昆虫や樹木、水辺の生物等の生息空間の保全と共生を図る技術を学びます。



FECスチューデントサポートクラブ

フィールド教育センタースチューデントサポートクラブを立ち上げ、1~4年生が資格取得・研究活動に取り組むことが出来る環境を整備しました。入学後すぐに農学を学び、実践することができます。教員が学生を育てるだけでなく、先輩が後輩を育てていく体制を整えています。

◆ 資格取得



造園技能士(2級・3級)



園芸装飾技能士(2級・3級)



ツリークライマー(MRSI・2・3) 日本農業技術検定(1級・2級)



その他の資格

- ・刈払機取扱作業安全衛生教育・毒物劇物取扱責任者
- ・高所作業車・伐木・チェーンソー作業従事者特別教育
- ・小型移動式クレーン運転技能・玉掛け技能 ほか

◆ 農業女子プロジェクト(農水省)に参画

農業に関心のある学生を広く集め、播種から販売まで実践しています。フィールド教育センターの温室を利用した活動や、地域の農家と連携した学外活動を展開しています。



ナスとトマトの定植



田植え

南九州大学 都城キャンパス
〒885-0035 宮崎県都城市立野町3764番地1
TEL: 0986-21-2111 FAX: 0986-21-2113

南九州大学のホームページでも、
フィールド教育センターの様子をご
覧いただけます。
QRコードはこちら



農学教育実習センター 農場部門

農場部門では、人と自然の共生を考慮しながら人間の生活に欠かせない安定した食糧生産の確立に貢献する即戦力の人材育成を目指しています。阿蘇くまもと臨空キャンパスおよび阿蘇フィールドの圃場は農学科の農学実習や卒業研究で活用されており、露地野菜・作物・施設園芸・果樹・林業など植物全般の栽培・管理作業について学びます。農学部の教育方針である実学尊重を母体とした実習のカリキュラムとなっています。



阿蘇実習フィールド(旧阿蘇キャンパス)の学内水田は学生一人ひとりの手で20年以上前から無農薬、無化学肥料で栽培を続けている特別な水田です。本水田では阿蘇の恵まれた大地と湧水を背景に、自然環境、生態系、固有種の保全と循環を念頭に持続可能な水稻栽培により、学生が自ら水田を作ることができる知識の習得、日本古来より伝わる農耕文化の継承をコンセプトとして栽培しています。農学科2年次の農学実習では、手作業による田植えと稲刈りを実施し、また実験で行う生育調査や収穫調査、収量構成要素調査などとリンクして進めています。そして収穫した新米は、毎年、栽培した学生の保護者の方へお送りすることが恒例となっています。

2022年度からはこのお米に本学農学部産のブランド米として、「阿蘇乃舞」を命名しました。

〒861-2205

熊本県上益城郡益城町杉堂871-12

TEL:096-234-6513 FAX:096-286-3025



鹿児島大学農学部附属農場 指宿植物試験場

—ゴレンシ栽培技術の確立と実習教育への利用・研究・普及への取組—

鹿児島大学農学部附属農場は、学内に2箇所、学外に2箇所の施設を持つ分散型農場である。その一つである指宿植物試験場は、年平均気温 18.3℃という温暖な地域にあり、さらに指宿地域の有用資源である温泉の熱を利用し、温室・ビニルハウスを加温する独特の方法を取り入れた施設である。この特性を活かし、場内には約 600 種以上の熱帯・亜熱帯性果樹および植物類を導入、保存している。また、それらを用いた実習教育・研究を行っている。

そのひとつがゴレンシである。ゴレンシ (*Averrhoa carambola*) は、カタバミ科 (*Oxalidaceae*) ゴレンシ属 (*Averrhoa*) の熱帯果樹で、果実は切断面が星型をしていることから‘スターフルーツ’と呼ばれている。当场では 12 品種を保存し、現在そのうちの 4 品種を果実生産用として栽培している。主にポット栽培における果樹生産効率を考慮した樹形の仕立て方や、夏季高温時の施設内暑熱対策としての液体遮光材の利用など、国内ではあまり知見の少ない栽培技術の確立を行っている。実習教育では、接ぎ木によるゴレンシの苗木作り・摘果・追肥・害虫防除・収穫・食味試験などを取り入れている。これにより生産された果実や苗木は、大学内で行われる生産物販売のほか市場出荷を通して、地域の特産果樹形成に貢献している。



液体遮光材塗布後



ゴレンシ棚仕立て



ゴレンシ結実状態



誘引実習風景



接木(合せ接ぎ)実習による苗木生産



スターフルーツ果実



鹿児島大学農学部附属農場 nknojo@kuas.kagoshima-u.ac.jp

〒890-0065 鹿児島市郡元 1 丁目 21 番 24 号 Tel: 099-285-8771 Fax: 099-285-8773



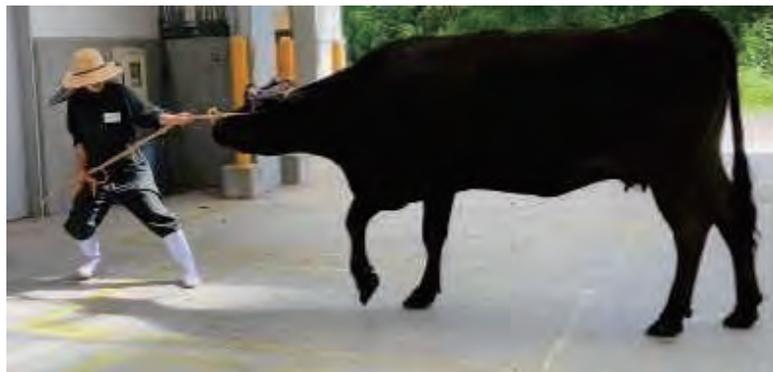
鹿児島大学共同獣医学部附属

南九州畜産獣医学教育研究センター入来牧場

入来牧場では1年を通して日帰り実習、4～5日間の宿泊実習を行っています。学外からの利用もあり、麻布大学獣医学部(獣医学科・動物応用科学科)の学生20名による宿泊実習も実施されています。毎回の実習では、学生さん達は初め緊張して見えますが、限られた時間を最大限に使って積極的に牛に触れ合い、慣れていく様子が伺えます。学生さん達の成長を感じることができ、最終日には全員を笑顔で入来牧場から見送っています。



子牛のブラッシング



繁殖牛のハンドリング・正姿勢



哺乳・育成・繁殖牛の飼養管理実習



放牧繁殖牛の行動調査



繁殖牛の体尺測定



草地生産概要の学習



ロープを使わずに追い込むテスト

今後も鹿児島大学内だけでなく、外部とも連携して肉牛生産過程のフィールド教育・研究に取り組んでいきます。

鹿児島大学 農学部・共同獣医学部等総務課 農獣医附属施設係

〒890-0065 鹿児島市郡元1丁目21番24号

TEL:099-285-8771 FAX:099-285-8773 Email:nknojo@kuas.kagoshima-u.ac.jp

琉球大学版技術者養成プログラムの実践

琉球大学農学部附属亜熱帯フィールド科学教育研究センターでは、一般社会人向けの技術者養成プログラムの開発に取り組んでいる。2023年度から当該プログラムの実践を行い、2024年度は大学の農学系技術職員と沖縄県の農業改良普及員の研修を実施した。



九州地区農学系大学（九州大学・佐賀大学・鹿児島大学）の技術職員の研修プログラム

日時:2024年8月29日（木）

場所:琉球大学農学部附属亜熱帯フィールド科学教育研究センター

場所:GAP講習会（座学）、トラクタ機能紹介、作業機の適正な取付方法（標準3点リンク、特殊3点リンク、オートヒッチフレームなど）



格納庫でのGAP講習会



トラクター練習場



技術職員による講習会



畜産系の農業改良普及員への技術研修プログラム

日時:2024年10月31日（木）

場所:琉球大学農学部附属亜熱帯フィールド科学教育研究センター

場所:GAP講習会（座学）、ウシのロープワーク、ホイールローダの操作、牧草ロールの運搬



ロープワーク



ホイールローダで堆肥の切返し



グローブ操作



地域イベントでの農学部の紹介（農業機械体験・ヤギの触れ合い・野菜販売など）

日時:2024年7月17日（日）、12月22日（日）

場所:西原町民交流センター（さわふじ未来ホール）



農業機械の操作体験



移動式ソーラシステムの展示



学生達で作った野菜類



【千原フィールド】〒903-0213 沖縄県西原町千原1番地

Tel: 098-895-8740（事務）、E-mail: ngsisetu@asc.u-ryukyu.ac.jp

2025（令和7）年 3月31日 発行

編集・発行
全国大学附属農場協議会「一農場一アピール」編集事務局
九州大学農学部附属農場
TEL 092-802-4533

Mail: ozaki.yukio.255@m.kyushu-u.ac.jp
（編集幹事）尾崎 行生

印刷・製本 城島印刷株式会社
〒810-0012 福岡市中央区白金 2 丁目 9-6
TEL 092-531-7102
FAX 092-524-4411

